Dec. 1896
no. 432

明治廿九年十二月二十五日

女學雜誌

第四百卅二號

第四百三十二號目次

社說　一歲の所得、何ものぞ◎內地雜居後の女學、英學

女學　女學卑近の研究　櫻井鷗村
壽婦を論ず
男子、女德の衰頽をいふべき乎◎離婚の人◎明治二十九年の女學界

評論　宗教家の改革談　如雲散士

大和心　女性の修養　波濤
一葉女史を傷む

教育　獨嘯教育界(開發的)◎人才登用◎文部大臣◎官吏養成◎一校の長◎教育を輕んずべし◎氣節憫慨の教育)
福澤翁の教育論◎府下の二大教育會◎學生の罪惡◎學生の風儀◎學校の價値◎英國教育の現情◎幼稚保姆合唱の歌

隨感　虛顯自照不勞心◎未だ曾て名士を見ず◎非情の情◎死別生前の恩◎根本的改革◎歸天齋正一◎忝けなさの事情

雜錄　秋風の竊(隱花)◎貞操觀(青柳有美)◎髑髏(非口子)◎冬の韻(和歌數首)◎案山子廼舍諸社中詠草批評(續)

時文　方丈記評釋◎大鏡讀本◎梨園の落葉◎警世雜著、鐵道新論◎片戀◎文の庫◎綱代木

片々◎時報◎廣告

附錄　(明治二十九年中女學雜誌總目錄)

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	壹冊價金拾錢　一年前金金貳圓(無郵稅)
廣告料	一行一回(廿七字詰)前金十錢　同三回以上一割引　同六回以上二割引　但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし(郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注々	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あて申越さるべし

前號 第四百三十一號目次

社說　瀧の川孤女學院

家庭　牧師の妻、如雲)◎名士の子に愚物多し◎改革せざる改革◎室家の音樂(鷗村)◎子供の言葉◎桂を燒き玉を炊ぐ

講義　彈力機關車の發明家、關水春吉氏(岩野泡鳴)

文藝　書の道(石翁)◎案山子廼舍諸社中詠草(池袋清風大人評點)◎花圃の下草

史傳　樂聖セシリア

問答　氣むづかしき男子の慰さめ方

雜錄　小說、野路の菊(紫琴女)◎樋口なつ子ぬしをいたむ(殘花)◎四季の歌(紫苑)◎歌のかずくく(花圃女史撰)

時文　支那文明史論◎カルパート◎田村將軍◎江湖文學◎阿蘇のけぶり◎照日姬◎小說六佳選◎初陣揃◎鷲の羽風

片々◎時報◎廣告

附錄　マックス氏著『光』

自由黨報

第百廿貳號目次

明治二十九年十二月十日發行

黨論
進歩黨は四分五裂せむ……江原素六

論説
政黨精神の差異……佐藤琢治
進歩黨機關の亂調……芙蓉隱士
樺山内相を彈擊す……蓮池凡見

雜錄
破天荒（乾）
泰西各國豫算

世界
朝鮮○支那○露西亞○佛蘭西○獨逸○伊太利○土耳古○西班牙○英吉利○合衆國○濠洲○布哇

黨報
代議士總會○關西大會○關西懇親會○關西演説會○四國大會○豫洲松山演説會○福島支部總會○福島縣二本松町懇親會○東北會○宮城岩手兩支部の總會○千葉縣長生自由倶樂部發會式○關東會の協議○自由倶樂部○福島縣の新入黨者○林政務委員一行の歸京○水害視察員○東京支部會○秋田縣有志の寄贈金○代議士及黨員の往來

時事
松方内閣の未來○當年の意氣何くにかある○自惚の冥罰○喘這兩面怪兒○齒痒的演説○可憐の極○嘻噫時事可知耳矣○江戸の花○惡魔も却て舌を捲く○未知義理人情之爲何物○御門違ひ○兩説何れも通ず○果然々々○親も親也子も子也○奇怪なる頭割○狼狽艴航○個中の消息○一篇の封事○隨德寺○巢鴨○病院○什麼生の公案○斷平たる決心○玄洋社○新刊紹介○時事日記

每月二回發行定價一部金六錢

東京芝公園第五號地二番

自由黨々報局

每月一回廿五日發行



定價 一册金八錢郵稅金五厘半年分六册前金郵稅共五十錢◎一年分全上金壹圓

本誌ハ第五十九號ヲ以テ大改良ノ端緒ヲ啓キヌ爾來其發行日尚淺キモ幸ニ大方ノ信用ヲ博シ愛讀者頓ニ増加セリ依テ本社ハ奮勵一脚ヲ進メ躰裁ヲ美ニシ紙質ヲ上等ニシ定價ヲ改正シ倍々特別寄書家ヲ増員シ**西洋音樂雅樂俗樂**等ノ部門ヲ定メ專門大家ニ托シ記事ノ範圍ヲ擴張スルト仝時ニ材料ノ精撰ニ幾層ノ擴重ヲ加ヘ金篇五什相應シ相和シ題號ニ肖エテ本誌ノ聲望偏ク世ニ響キツタランヿヲ期ス冀ハ同好ノ諸彦益々愛讀ノ榮ヲタマヘ

第六十四號 拾二月廿五日發行◎揭載諸欄、口繪、説林、講壇、文苑、史傳、歌曲、寄書、雜錄、問答、通信雜報等最モ斬新有益ヲ極メ光參陸離タリ

發賣元 東京市京橋區竹川町十三番地（電話番號本局五百二十九番）

共益商社書店

女學雜誌

第四百參拾貳號

明治二十九年十二月十五日發兌

社説

一歳の所得、何ものぞ

日暮れ年逝きて、一歳の壽命旦夕に迫まれば、愕然として過來し方を反顧せぬものはあらざるべし。花開き花落ちて、紫紅の榮枯の心に關せしは春にてありき。一吹の凉風に襟を亂し、一朶の村雲に月影を慕ひしは夏にてありき。梧桐の落葉に哀を催ふし、鴻雁の去來にさびしさを歎ちしは昨日までの秋景色と思ひしに、霜降り、氷結びて、冬氣全く熟し、指を屈へ此の年の別離を恨むべき今日とはなりぬ。世上の諸人、感慨するところ果して如何ん。

日を送り日を迎ふるは、原頭の露草が千古爲すとを渝へざるところなり。流にそひて行く水に接はり、僅かに勢趣に觸れて一端を潤ほすは、果なき水草の常に爲す所なり。天候温たかき時、辛うじて不時の準備を爲し、多少の貯蓄を集めて稍や得意の狀あるは、小蟻に於て之を見る。河底の土砂も亦た嵩みを增し、山野の雜木も亦た其の丈を延ばす、所謂る事功の成長なるもの珍らしとせんや。去らば則ち人間たる吾輩一歳の珍重はそも〳〵何ものぞや。

大凡そ人其の常習に慣るる時は即ち其の器となる。器械もと不思不感の躰なるが如く、既に器械的となりて豈に新たに感激する所のものあらんや。人々たゞ斯の如くして無意識に勞役す。營々として一歳を過ごし、遂に其の所以を覺らずと雖ども、今や則ち俄然として感發する所のものあらんずらん。諸君當該の實際は如何に。

渴しては飮み、餓ては食ひ、帝德を知らずして勤め、吾才を覺えずして役す、人の無意識なるは即ち其の大なる所以なるべし。冀ふらくは、老の到るを忘れ、死の迫るを識らず、安如悠々として人生の當務を盡さん。然りと雖ども、既に時を刻みて歳月の符を記るし、故さらに人爲の區劃を置いて、

去今往來の意識を鮮やかにせんとす。吾等自から之を制めて其の計度を無益にするは可ならんや。密かに、歳末に接して、其の端尾を履む。將に葬らんとするの墓側に立ちて、有情の徒の感慨はいかに。

もし人の一生に命數ありとせば、成長は即ち終に近づくにあらずや。人何をもて之を賀せんとする乎。歡樂の極まる所、愛情あり、歡樂を盡すは即ち哀しみに近づくものにあらずや。功業を增して憂患多く、智識を加へて疑惑生ず、交友の數の殖ゆるは、毀譽の波紋の擴がるなり、虛名の高く揚るは、風衝に觸るゝことの強きなり。人生の價値何ものぞ。一歳、一歳の荷を積んで之を重くし、即ち呼んで人生の號を附す。人生そも〳〵知る可らず、一歳の價値はたして何ものぞ。

嗚呼、大疑は大信の基なり。世人深く思はず、故に深く疑ふとなし。深く疑はず、安くんぞ亦深く信ぜんや。夫れ、眞勇は大信に發し、極樂は大信に結ぶ。人もし先づ疑ふ所なくんば如何ぞ能く開悟せんや。吾人は、歳尾に處して懷疑の切りに隆んならんことを希ふもの也。

內地雜居後の女學、英學

條約大方は改正せられ、內地雜居は二年三年の後に迫まり來る。政府に之が爲めの準備委員、設置せられしと同もに、民間の用意も一と方ならず。商家の丁稚小僧すら、英語を學び置かずんば最早や人らしき待遇を受ることも成るまじと掛念し堂々たる哲學博士すら、之が準備の爲め鬼門退治を絕叫するに至れり。之を目下の通勢とす。

果して然らば、雜居後の英語流行は如何に慘まじきものにてあるらん。外國人は海の潮の寄せ來る如くに到來し、英語の談話は秋の木の葉の散る如くに囀づられ、三々五々、同歩立談する折節にても、若しや英語を解せざれば、罵しられても辨まへず。八百屋の店頭に芋一本を購ふにも異人流の談判を免かれざる形勢とも相成るべし。苟しくも然らば、外國語を知らざるの不利不便は、想像以上の事なり。隨ひては、學ぶもの、談ずるもの、肩摩轂擊の繁昌を爲さん、其の流行は大風の吹荒ぶよりも荒く、津浪の押寄するよりも尙ほ隆んなるべしと言ふものあり。

之に懸連して、女子の英語講習を如何にせんと心配するもの尠からざるにや、近來往々、書又は言葉を寄せて、其成行を質問せらるゝものあり、吾人はつねに無造作に答へて曰く、英語は、世界語なり、もし之を學ぶ程の餘力と資本とのある方々は、其の男女を問はず、何時にても勉學せられて然るべし、吾人は切りに奬め參らするもの也。然し乍ら、單に內地雜居後の形勢の爲めに其必要を感ぜらるるとせば、そは別に一考を要するなるべし。雜居後なりとも、外國人は左樣に多く俄かに到來するものにあらず、來るものは、商賣の爲めか、遊びの爲め也。遊びの爲めに來るものは、保養の爲めゆゑ、寧ろ日本人の日本語を聞たかるべし、左なくとも、金持の餘裕として通辯位は同伴すべし、之に出あふ人々が皆な英語を知らざる可らざる必要もあるまじ。商賣の爲に來るものは、まうけの爲ゆゑ、彼等如才なく勉强して、自から日本語を稽古すべく、然らざれば、通辯を雇ふべし。此等の人々に當方より心配して、多忙の中に英語を用意し置くほどの厚恩に預かりたる覺えもあるまじ。左れば、左樣の必要を想像しての英學講習ならば、寧ろ止むるに若かずと。

然し乍ら、將來は、(就中、雜居後は)、高等小學以上に英學科を入るゝこと一般の流行となるべし。子弟、小學に英語を學び、歸宅して稽古する時など、母たる人にして、英字は竪に書いたるものか、横に讀むものかをも知らざれば、不都合なるべし。今の家庭に於ける古風の母が、其子の小學校の稽古を監督するとの出來ざると同樣なるべし。是れ、中以上の家庭に主婦たる女子の恥とすべき所ならずや。左れば、たとひ英語を談じて實用とせざる迄も、將來の家庭教育者は、多少の英語の智識なかる可らず、これ今に於て、女學に英語を加へ置くの必要ある所以也。故に、吾人は此の主意をもつて、普通の女學(即ち、普通の家庭に主婦たるべき婦人の普通敎育)には、英學を一學科とすべしと說き、而も此の理由を據所として其の學科時間を計るべしとは言ふ。

蓋し社會の事たる、風聲鶴唳の爲めに活動すること多し、景氣と云ひ、流行と云ふ者これ也。英語の流行も存外の空想に發して、意外の景氣を持つこともあるべく、一度び流行り出せば、數年は破竹の勢なるべし。乍然實地の大勢は、實際の必要より發す。眞面目の人は暴に之に伴ふ可き者に非ざる也。

女學

女學卑近の研究

今の女子教育を講ずるもの、學理を遠きに求めて反つて近きに忘れ、研究の太はだ要緊に中らざるもの多し。動もすれば則ち曰く、英國米國の女學は斯の如しと。只管らに其外形に驚きて其の眞相を洞察せず、直ちに移して之を我國に植ゑんとす、好結果を得ざるは當然に非ずや。夫れ、社會は活物なり、其の外形は千態万状ならざるを得ず、故に東西互ひに風を異にするは勿論なりと覺悟し、徒らに其風の同じからんことを期せずして、直ちに其の神髓に察せば、古今の情の一なるが如く、彼我の實相の相似たらんものあるは明白なり。凡そ、同等の文明に達したるほどの間柄なりとせば、互ひに其の風を異にすとも、其の精神を同じくすべし、然らば必らずしも模倣することを要せざる也。もし又不同等の文明の間柄なりとすれば、直ちに彼に模倣して其の外形を採らんとするは不可なり、これ適度開發の順序に隨はざるものなれば也。抑そも、何の用ありて容易すく外國の風俗に驚ろかんとはするや。

寧しろ如かず、道は極めて邇きにあり、汝の師、汝の理は、茅屋庖厨の邊りにも普ねく存在すれば、採つて以て善究し、講じて以て利用し、事の實際に通じて、益の緊急なるものに應ぜんには。政治は、凡俗の人情を知るによりて其の道に適し、宗教は、愚婦愚夫の信仰を知るによりて其の坪に當る。女子教育の一秘訣も亦た下女、お三、女房、女將等の實際を知るにあることを。

社會學者の曰く、人の研究することの尤とも晩きものは即ち人也と。吾人は曰はん、人の研究することの尤とも晩きものは、即ち人の中の女也と。世人の「女」を知らざる亦甚しと云ふべし。女自身も亦た知らず、知るも容易すく語るものに非ず。かの男子の女性を知らざるに至ては、何ものにか喩へん。哲學士曰く、人何處より來り何處に行くを考へざるは如何にと。左れど、吾が出で來りたるは一先づ母なりとせん、吾が行く先には、看護婦ありとせん。而して、この終始後先の何如な

る人なるやを辨知せざるは、男子の通弊なり。凡そ古來、人情に委しきものは、皆な女を知れり。故に、世故に經歴し、人事に浮沈せし輩は、太たく女性を尊敬す、これや、女の性を知つて、其の勢力の非常なるに歎ずれば也。古へより此の情合を知らざりし政治家にして能く成功せしものはあらず。古へより此の秘密を察せざりし歴史家にして能く明斷せしものはあらず。若し、男子間に大なる爭ありとすれば、何處にか女性の隱るるを見ん。若し、大なる罪の犯されしものあらば、何處にか女性の關係するを見ん。若し、大に流行するものあらば、亦何處にか婦人の助力あるを見ん。此等は世故に經歴したるものにあらざれば知らざる所なり。故に達人は皆な此の秘義を察す、ひとり生意氣學者の徒、やゝもすれば則ち曰く「何の女が」と。輕忽此の一言を吐くほどの人や、大率世上のオポッチヤマたるを免れず。

夫れ、女學當路の人にあらざるも、達眼の見る所は常に斯の如し。然るを况んや、身現に女子敎育の任に當り、女性の開發と、其の善導とに志あらんものに於てをや。事の隱微に洞察して、理の玄妙なる所に研究せずして可ならんや。徒に、死せる制度を取調べ、文字の黒白を講究し、迂遠の一論客として止むべけんや。而して、凡そ此般の通弊に免かれて、實地の好學問に悟入するの秘訣は、只だ先づ近きに經驗して、生ける手近の人物を研究するにある也。

毒婦を論ず

櫻井鷗村

某曰く、女性もし善果に達すれば天使とならん、若又然らずして惡果に達せんには惡魔とならんと。盖し彼世に毒婦の稱を以て忌避せらるゝものゝ如きは、即ち天使とも上達し得べき女性の墮落して、惡魔となりしものならん歟。毒婦たるや、實に其名の稱するが如くに、婦女中の虎狼なり、蝮蛇なり、吾人素より之を惡憎忌避す。然るに猶ほ多くの毒婦なるものに就きて、細に其胸臆を探り、其性情を察するときには、彼等に於て可憐不愍の點なきに非ず。夫れ今日、女德の嚴直ならんことを强求するの社會に在りて、惡憎すべき彼毒婦を憐愍すといふ、故に奇を好むに似たりと雖も、深秘奇怪なる毒婦の性格の如きは、これ正に平生女學を言ふを事とせる吾

人の研究すべき一要問題たるべきを以て、今試みに、是が解剖探明の一端をいはんとす。

毒婦の性格は頗る複雑なり。然れども先づ其要素とする處のものを畧言せば、彼等は一般に容貌妖冶婉麗にして、敏才猾智あり、情に熱烈にして、又特に女性に普通なる狂斷の性に富み、加ふるに膽力を有し其幼少時代に在りて、浮華淫靡の敎育を受けたるもの多し。而して彼等はいづれば、青春時代の情念熱熾なる其初端に於て、悲痛慘憺たる大失望の强打擊を蒙りたるものならざるはなし。この大打擊こそは即ち、性素柔和従順ならんことを欲するの女子をして、よく獰猛殘忍なる悪行に狂奔せしむるに至しめたるの最大刺戟物たりしなれ。」

凡そ女子は姿色が第一との世諺はあれど、其姿色の婉麗婀娜なると、多くは是れ年少き女子の飾に非ずして、其戒なり、其呪なり、而して女子の最大弱點の機密は爰に在す。然るに此義を悟らずして、朝槿衰へ易きの美貌を自覺して、之を誇矜するは、戒を破り、呪に陷りて、品性の大墮落を來すものなり。彼恐怖すべき般若の形似を見よ、これは是れ、邪見悪德なる美人の變化を示したるものに非ずや。所謂毒婦ともなるべき程の女子は、此美貌の呪咀を蒙らざるもの稀に、また假令妖冶婉麗の美色なきも、倘眉宇の間に、輕薄なる男子を惱殺するに足るの魔力を有し、自らも亦是あるを自覺して、以て其悪行を遂ぐるの第一利器となす。而も長じて毒婦となりしものは、多く其幼時に於て多情淫奔なる性質の修養を受けたるによりて、其容色の粉黛僞飾に注意し、且天賦の敏才猾智を廻して、事に應じ、機に處して、平然巧に其狼心狐尾を陰蔽して、男子を誘惑するの術策を知れると、これ亦毒婦が爲めの最要の利器たるなり。されど彼毒婦は、其初より決して毒婦の狼心狐尾を有し得るものに非ず、假令ひ美貌ありて淫奔の性あり、且俊才猾智ありと雖も、其世路坦々として、大悲痛の失望あるなくんば、或は淫亂不德の女子とはなるべきも、よく殘忍獰悪なる毒婦となり得んや。

夫れ愛情の滿足は、女子に於けるの最大事件なり。榮譽富貴に戀着し、美衣美食を貪求し、大厦高樓を欲望するは、これ常に男子の事にして、多くは女子の事に非ず。女子は何よりも先其情念に於て滿足せんことを熱願す。女子も亦彼男子常に欲望する所のものを欲せざるに非ず、然れども愛情の滿足を

獲んが爲めには、富貴榮華も何するものぞ、君と共なら、手鍋を提げて、片山里に貧困疾苦の侘住居も、決して疚しとする處に非ずとは、眞によく女性の衷情をいへるものなり。既に愛情の滿足を獲たるの後に、女子は其情人をして男を賣らしめんが爲めに、または其子女をして安樂ならしめんが爲めに、富貴榮華を切望するヿあれども、其時もなほ自己の爲めに之を欲するヿ尠し。また一旦情念に於て失望したる時に、富貴榮華を貪りて、是見よがしと人に當て付け、恨怨に報讎せんとするの女子あり、兎に角に情念は、其一擧一動を支配す。女子の性既に如此し、されば愛情の失望は、女子の一生に大變動を來たらしむべきの强刺戟となりて、よく彼等をして、死に就かしめ、またよく狂亂せしむ。而して彼毒婦の如きに至りては、情念の極めて熱烈なるものなれば、其青春の情思劇發するの初めに於て、尊敬順服するに足るの男子によりて熱愛せられしならんには、彼等は必ずや柔和温順にして女らしき一生を營むの道を開き得たりけんに、憐むべし、彼等は、其情念の滿足を求めたるの發端に於て、輕薄なる男子の爲めに、其愛情を玩弄せられ、剩へ、殘酷なる待遇を受けしか、若くはまた此種の慘事を見聞するヿありしかによりて、女子が其生命を托せる愛情の滿足の、以て達すべき最暗黑の方面を觀じたるヿあり、此時女子は大失望の奈落の底に沈落して、死せずんば必ず狂せん。而して毒婦は情に於て狂したるものなり。此失望の狂氣は、淫奔多情なる性の修養ありしものならずして、假令良家庭に生ひ立ちし女子と雖も、其暗黑面の悲痛を感ずるヿ、最も劇甚なるが爲めに、性情劇變して、天晴淫心殘忍の毒婦となり得るものあり、此時に當りては、幼時受けたる良教化も、寸毫の甲斐なきに了る。

女子は情念を以て其生命となすが故に、怨恨深く、嫉妬甚しく、睚眦の恨も必ず之に報いんヿを欲す。然れども、其怨恨嫉妬は、容易に之を外に發せず、出來得る限りは、之を制し、之を包み、其抑制するヿの强き丈に、一旦其迸發するに當りては、狂暴これ極めて、大惡漢と雖もなほ企て及ぶ能はざる底の獰惡事をも、よく忍んで之を行ふヿあり。且つ女子には膽力あり。抑も世人の女子を目して小膽なりとするは、たゞ其皮想を察したるのみの謬見にして、又女子は其平素の教育によりて、少の事にも怖れ戰くやう躾けられありと雖も、實

際大難變事の得止ざる場合に臨んでは、沈勇不動の膽力あるとは、男子よりも寧ろ多く女子に於て見る所なり。囚人の統計上に於て見るも、悪事に執拗大膽なる事、女子の方に多しと聞き、また繼母が繼子をいぢめる折、大膽殘忍なるの事は、男子とてもなほ三舍を避くる所に非ずや。蓋し女子は其特性として、巧に自我を陰蔽し得るの故、此大膽なるを蔽ふに、外見の小膽なるを以てするとは、更にまたよく大膽の行爲を遂げ得せしむるものなり。温良淑徳の女子は、自ら己が大膽なるを自覺すると尠く、殊に情念の滿足を得て時所位の安泰なる時には、萎々として、可憐に女らしき所のみ發現するなり。然れども一旦情に於て狂したる毒婦が、自ら己の膽力に富めるを覺りて、愈々之を陰蔽し、之に加ふるに彼劇甚なる恨怨嫉妬の情を以てして、鎭壓抑制したる慣念、一時に劇發するとき、其狂斷の暴勢によりて、よく多數の人を殺し、殺したるのみにては飽きも足らはず、悪漢ならば大槪殺して了へば、氣も晴れて、後で南無の一言も手向ける位の處、毒婦はなほ其死骸を蹴り、其肉をも啖つて、怨恨未だ解けず、不愍の心も起さず、之が爲めに良心の責罰を抑壓し悪虐を屢〻にして怖れざるなり。

彼等一旦情念の大失望に鬱狂するや忽ち不安不定の心情に陷り其淫心苟且の泰きを得んが爲めに、多くの男子を誘惑玩弄す。彼等に玩弄せらるゝ底の弱志輕薄の男子は、到底心强き毒婦の情念の狂熱を鎭壓して、女らしきに立ち歸らしむると能はざるが故に、彼等男子の前に在りて、其兇悪を勉めて陰蔽し、阿諛を呈するとも永くは連續せず。己が變心によりて、彼等をうるさがり、邪魔に思つて、之を除かんが爲めに之を殺すとあり、また男子の變心を恨んで之を殺すとあり。毒婦其初め一たび此殘虐を成就したるの時には、己が手練と膽力との案外にも多量なるとを自覺して、爰に毒婦たるの本相を備へ得るなり。されば其後には、幾度でも其暴虐を繰返して恐れざるに至る。然るにまた心の邪悪なる女ほど、よく其邪悪を陰蔽して、外見を飾るが爲めに、浮薄好色なる男子はうか〳〵と其媚言にはめられ、一瞥の眼光に、心の底まで溶かされて、毒婦の網罟中に生擒せられ、果ては生殺與奪の權をも占有せらるゝなり。毒婦の慘虐如斯に荒暴なりと雖も、由來彼等は女性的情念の狂熱を以て暴斷を行ふものにして、猶其

情念は、自己よりも力強く、度胸優れたる男子を尊敬し之に服從して、滿足平和を得んことを欲するや、極めて切なるものなきこと能はず。是れ毒婦の滿腔の情念を傾け盡くせる、眞の情夫には、多く剛膽暴戾なる大悪漢ある所以なり。鬼の亭主ならでは、鬼神の女房は滿足し能はず。然れども此鬼の夫婦と雖も、其情交に至りては、佳人才子の間に異なることなく、温雅優美に、相愛の念に滿ち盈ちたることや疑ふべくも非ず。殊に毒婦の平素兇悪なるも、此情夫の前に在りては、造次顛沛にも愛情の衰へざるやう、勉めて其爪牙を陰蔽し、また其兇行の舊悪を、何とぞ言ひ出して呉れぬやう願ひつゝ、其狀の可憐なる、眞に女らしさの態度あり。然れども又時には情夫の歡心を買はんが爲めに、または彼の兇行を助けんが爲に、非常の暴擧に出づること尠からざるは、毒婦傳中多く見る處なり。

毒婦の心情正に如斯くなるを以て、今若し彼等の熱狂なる情念を鎮め、彼等の胸臆に滿足を與へて、漸々善道に立ち歸らしむる丈に、剛氣勇邁の男子ありて、彼等に寄するに熱愛を以てすることあらんか。毒婦も玆に至りては、必ずや化して温良柔和は善婦たらん。彼等毒婦もと情念の失望によりて、慘憺たる暗黒裡の悲慘に陷り、爰に情狂の者となりたるものなれば、よく之を鎮壓して多幸なる光明に導き、其眞心の力を增し、眞の女らしさに立ち歸らしめんとも、また熱熾なる情念を以てせずんばあらず。義理といひ、道理といふものは、決して毒婦とまでなり果てしものゝ迷妄を排し得るの効力なく、これをなし得るもの、たゞ同情熱愛あるのみ。毒婦元來非常の人物なれば、一旦其悪行に非常なるを翻せば、忽ち化して、善行に非常なるものとなるものとなり得ん。此轉變の機密は即ち他より受くる情の熱度にあり。**由來女子を活殺するの權能一に情に在るの事、爰に於て頗るよく其妙用を闡くものと謂ひつべし。**

要するに世人は、彼蓋棺なほ其罪悪を蔽ふこと能はず、其醜名永く女德の戒めとなれる毒婦の聲を、悪憎することを知り、之を憐愍することを知らず。殊に知らず彼等毒婦の胸間には、また一片可憐の哀情の勃如として存在せることを。また知らず、由來毒婦を養成するの素因、多くは男子に在つて存することを。而して世の毒婦を罪するもの、獨り彼女子其者のみを罪せんとす。白氏は婦人の身、百年の苦樂男子に賴ると歎ずれども、

たゞに百年の苦樂のみならず、女性が不滅の品德、其昇降浮沈は、實に男子に頼れり。貞女烈婦は人の賛歎欣慕する處、然りと雖も貞女烈婦を造りたるの力多くは男子に存するとを知らずや。曾て孝廉を以て官賞を受けしもの、人に語りて云へるとあり、曰く吾が今日の榮譽は、實に父母の吾に渇すに道を以てせられしが爲めなりと。夫れ子孝行の親ありて後に初めて、親孝行の子あり、熱情至誠の男子にして。初めて貞烈淑德の女子を得べし。然れば彼毒婦の徒と雖も、其初め彼等がよく兇暴殘虐の悪行に忍なるものと迄に墮落せざりし日に、彼等に寄するに熱愛を以てし、至誠を以てするの男子ありたりけんには、彼等は元來他に卓出するの氣象を有せるものなるが故に、貞女烈婦となりて、千古に芳名を薫ずるものとなりしやも知るべからず。這般の妙機人知ると稀に、獨り毒婦の罪業の結果を悪憎して、之が素因の存する處を思はず。然り世は女子を遇するとに頗る不公平にして、女德の衰頽の如きは寸毫も之を假さずと雖も、男子の衰頽の劇甚なるも、之を處する頗る寛大にして、而も男德立ちて後、初めて女德立つべしの理を知らざるものを。况んや罪跡顯着、頗る悪憎すべき毒婦の徒の衷情を憐憫するとをせんや。於是乎、吾人は爲めに彼等に寄するに一滴の涙を以てせざると能はざるなり。

毒婦の性格たるもと複雜にして、また人を異するによりて、其發現を異にすれば、或は毒婦傳中の某々等を擧げて、例證となし、其性格を研究せんと、探明の道に於て、甚だ便宜なりと雖も、吾人は故に彼甚だ忌避すべき名を言まじ。故に以上はたゞ其概畧を論述して、稍や一般毒婦が性格の肯綮に中し得たらんを信ず。天下の毒婦、此論を聞いて首肯し、微笑を洩すとあるや如何。

男子、女德の衰頽をいふべき乎

曲浦

先つ頃某氏、當今の女德はいたく衰頽したりとて、頻りに慷慨するが如く、また嘲笑するが如きの説を述べしや、いと珍奇なりと思ひてや、之に相應和するの説さへ見えき。吾人は此有様を見く、可笑さに堪へず、而もまた其大膽なるに驚く。何となれば、今の世の男子は未だ女德の衰頽を云々する丈の權能を有せざれはなり。

凡そ人には、敵の良き事よりも、悪しき事を聞き出したき癖あるものなり。敵の悪き事は少しの事でも、極めて大業にいひ振らして、シタリ顔に、其間我が悪き事は、棚か天井かの隅へ仕舞込んでおくものなり。男子の女子に對するもまた如斯し、其癖女子の媚を求めたがるかなれど、なほ男子の女子を見る事は仇敵の如く、女子の欠點といへば少しにてもかくては女徳を破るとぞと、之を氣の毒がるに非ずして、面白さうにヤンヤと囃し立てたがるものなり。女子の一擧一動をば女徳の定規準繩にて規矩し、其正しからんことを要求すると頗る嚴格なり。如斯く女子に對する制裁の嚴重なるとは、却て女子が道徳の爲には幸なるとなれども、男子は知らず、女徳を亂るものも、男子にして、また之を正しうするものも、多く女子に非ずして、男子に在るとを。男徳もし正しければ、女徳何ぞ亂るゝの理あらんや。貞女烈婦の養成も、多くは男子の徳の力に在り。夫れ女徳の衰頽の最も醜陋を極むる處は、彼遊廓に非ずや。然るに彼等娼婦の徒を禽獸視して、檻に等しき格子の内に蓄ひ置くものは、これ男徳衰頽の致す處に非ずや。旦に北里の門を出で丶帰る昨夜の客、驕奢傲遊を試むの花々しきならば未だしも、それにはならで、情なや、たゞ僅に一時の獸慾を満たし得たるの醉夢今全く醒めて、悄然其歩を運ぶもの丶、何ぞ多きや之を見るの時、なほよく女子の面前に女徳の衰頽を云々するに大膽なるの無恥漢ありや。

離婚の人

長汀

某女學校の卒業生の十八人中に、五人は離婚者なり、これぞ敎育ある女子が、女徳の正しからざる證據なりとて、やかましくいふ男子あり。然れども今よく彼等離婚の内情を探明せば、却て案外の事實によりて、女子の方は、實に氣の毒に思はれ、男子の浮薄なるとの憎さげなるを認むると必ずや多からん。嗚呼痛ましくもまた悲しむべきは、滔々たる天下の破鏡離婚の女子なり。彼等が中には素より己が不心得不行跡によりて、今日の不運を招きたるものも尠なからざるべし。然れども其中、最も多きは、人の中にも別けて男子の移り氣なるによりて、飽き棄てられしものならん。初めは其美貌に迷ひしも、後にてはそれも一向珍しくなくなるもあり、初めは學問ある者がよしと思ひて迎へし女の、顔の美しからぬが否に

なりたるもあり、我に一生の苦樂浮沈を寄せたる其可憐の心根を知らずに秋風いと冷かに其閨門に吹きすさび、剰へ男の甲斐性と申立てして、他の女を愛するとなどをするもあり、舅姑と嫁との間の調和を計り與ふるとをなさゞるが故に、終には家風に合ぬなどとの口實を設くるもあり、其外色々の原因あれど畢竟するに、男子其妻を愛するの熱情乏しきが爲めに、樣々の箇條を惹き起して、いたましき離緣の種となると、最も多しといふべし。されば離婚の故を以て、女德の衰頽を證すると、速了に過ぎたりとせん。

明治二十九年の女學界

吁歲將に暮れなんとす。曩に、此明治二十九年の新歲を迎ふるや、其初辰に當りて、同人爐を圍んで、此新歲は之れ必ずや女學隆興の時なるべしと、甚だ希望を之に屬して、相慶賀したりき。而して烏兎匆々、十二の月次將に盡きんとして、既往を回顧すれば、吾人の希望、やゝ背かざるものありて、洵に此歲は女學の爲めに好運の時代なりしとを謝す。たゞ其中にも形に於て損失したるの痛ましさを感せざるには非らされども、概するに今年女學は其足を擧げて、隆々進步したるとを喜んで、なほ其步武勢運の來るべき新歲に入りて、一層の飛躍興隆を齎らさんとを望む。而して今此歲の終に一年の女學界を回顧し來れば、記して錄すべきものゝ要事件、大凡左の如きものならん歟。

◎一月

◎臺灣に公娼設置の計畫あり、府下基督教徒中の有志之が反對運動を試み、之が爲め錦輝館に政談大演說會を開きたり。

◎佛教從堀江某東京赤坂に愛敬女學校を起す。越後長岡町に親和女學校起る。

◎時の司法次官淸浦奎吾氏の演說『歐洲諸國女子敎育の沿革』大日本敎育會雜誌に出づ。

◎野中至氏夫人千代子其『芙蓉日記』を公にす。

◎二月

◎此月五日東京明治女學校類燒し。翌六日東京府高等女學校また燒く。同月また橫濱山手聖經女學校新築中の校舍燒く。

◎十日若松賤子事巖本嘉志子逝く。

◎三月

◎久米邦武氏史海に『神功皇后と漢の呂后』を論じて、東洋女權の消長史を述ぶ。

◎北海道顯正護國會は有志者の義捐金を獲、慈惠學校及同女學校を設立せんとす。

◎此月廿一日東京神田靑年會に於て、故若松賤子追悼會を開く。

◎在京自由黨先輩者の 夫人諸氏の設立せる自由黨婦人會は、往年加波山事件の

爲めに死したる志士の慰魂碑設立の爲め、義捐金を募集す。
◎野州足利の友愛義團は桐生町公娼新設反對運動の爲め、其意見を發表す。
◎元良博士『再婚と貞節との關係』を論ず。博士渡邊龍聖氏『男女の關係と教育』を論ず。
◎大坂梅花女學校長成瀨仁藏氏其著『女子教育』を公にす。
◎西園寺文部大臣女子高等師範學校に演說して、女子教育の切要を論ず。

◎四月

◎奈良縣高等女學校設立せらる。長野高等女學校もまた開校す。東京王子孤女學院長大須賀亮一氏白痴教育視察の爲渡米す。此月十三日發布勅令第百三十六號を以て、婦人勳章寶冠章になほ三等を加へて、勳八等に至らしめらる、
◎東京女子學院及東京獨立女學校に在りて、久しく我邦女子教育界に奉じたる米國婦人ツルー女史此月十八日東京に於て逝く。
◎萬朝報懸賞して『新選女大學』の起草を江湖に募る。
◎報知新聞『女子の職業』を掲載し始む。以來夏期中中休をなし十二月に入りて、大畧完結す。
◎此頃多くの新聞雜誌に於て女學問題に關する論辯を掲載すると流行す。
◎我國幼稚園の改良發達を圖らんが爲め、保姆及び幼稚園教育に篤志なるもの、フレーベル會を東京に起し、高等女子師範學校長秋月新太郞氏之が會長となる。

◎五月

◎十一日　皇女泰宮聰子殿下御降誕あり。
◎十八日　皇后陛下高等女子師範學校御行啓。
◎大日本婦人教育會は、其中以下の女子の爲めに設立したる附屬女學校及び無月謝小學校維持擴張の爲、上野音樂學校講堂に於て慈善會を開く。
◎名古屋高等女學校開校し、棚橋絢子之が校長となる。甲州山梨に共立女學校起る。
◎加藤博士『女學雜誌』及『日本宗教』に其『德義的問題に就き世間大方の解釋を求む』を載せてよりこれを加藤博士の實淫論と稱して、一時學界の物議を惹起す。

◎六月

◎此月三日　皇后陛下華族女學校に臨御せらる。
◎十九、二十兩日東京芝紅葉館に於て明治女學校義捐慈善市を開く。
◎臺灣へ渡臺する醜業婦、いよ〳〵多きを加へて、新聞紙其醜狀を報導すると多し。
◎赤十字社廿七八年戰役救護員として力を盡くしたる貴婦人の功を彰し、また諸方の豫備病院の救護に從事したる看護婦に慰勞金を與ふ。
◎清浦奎吾氏其『女子教育に對する意見』を『太陽』に出す。
◎時事新報の『社說』及び『福翁百話』は屢、女子教育に關して述ふる處あり。其社說にては『教育普及の實』及『女子教育』を論じ、『福翁百話』にては『女子教育と女權』『男尊女卑の弊は專ら外形に在るもの多し』と述ぶ。
◎報知新聞紙上『米國女子の職業』を數日連載す。
◎松本君平氏『英文國民の友』に『日本婦人及其社會上の地位』を載す。
◎『女學草子なでしこ』第一號出づ。

◎七月

◎此月十八日　皇后陛下華族女學校卒業式に臨御あり。
◎多くの女學校卒業式を行ふ
◎皇后陛下は去る二月中燒失したる東京府高等女學校の兼て新築中の校舍落成開校に就き、金二百圓を下賜せらる。
◎大坂眞言宗の僧侶佐伯某、一看病婦女學校を起さんとす。
◎去月十五日三陸大海嘯の爲め、東京をはじめ、地方の諸婦人會頻に運動す。
◎國民新聞『女子教育の方針』を論ず。
◎『福翁百話』は『婦人の再婚』『早婚必ずしも害あるに非ず』及び『女性の愛情』を說く。

◎八月

◎伊藤首相のデイリーニウス巡遊記者との談話なるもの、諸新聞紙上に譯載せら

れ中には華族女學校、賣淫公許及び日本女子の淸德等に關するの說あり。爲めに世上の物議を招きて、每日新聞の如きは『伊藤首相と女子教育』と題して、大に辯駁す。

◎七月一日を以て逝去したる米國の女文豪ストウ女史の逝去を弔するの辭、此頃慶本邦の新聞雜誌に見ゆ。

◎千葉縣大多喜町に實業補習女學校起る。

◎九月

◎婦人雜誌『大和心』第一號出づ。

◎九月十日女小說家田澤稻舟逝く。

◎佛教家にして女學論をなし、佛教は女子を好遇するものなりと論ずるものやうやく盛んなり。

◎十月

◎十月より『女學雜誌』每月二回發行に改む。

◎女子高等師範學校に保姆練習科を設く。

◎大坂婦人會慈善市を同市北區堂島商品陳列所に開く。

◎國民の友『婦女處世の困難』を論ず。

◎万國婦人矯風會第七回世界巡回遊說員クラーク、パリッシュ女史本月十九日を以て來朝す。

◎木場專門學務局長、茗溪會に演說して、女子就學の寡少と、高等女學校との欠乏は國力の弱點を來たすものとして痛論す。

◎田口鼎軒、經濟雜誌に『平政子』を論じ始む。

◎末松謙澄男『婦人の務』を演說す。

◎十一月

◎此月四日早稻田大隈伯邸内に、有志基督教徒等クラーク、パリッシュ孃の歡迎會を開く。

◎『大和心』第三號以下『女學雜誌』に合併し、『女學草子なでしこ』第三號にて廢刊す。

◎婦人育兒會第三回總會を東京小石川植物園に開く。

◎熊本尙絅女學校の天長節運動會の異態、物議を招く。

◎巖本善治甲府に遊說して、同地尋常師範學校に於て『女子教育』を演說す。

◎萬朝報(Women of Japan.)を論す。

◎洋畫家松井昇氏外四名の發起によりて、明治女學校義捐の爲め、二十日より向ふ二十五日間水彩畫展覽會を上野公園に開く。

◎此月二十三日閨秀小說家一葉女史樋口夏子逝く。

◎十二月

◎有志婦人檄を飛して、王子孤女學院の爲めに、義捐慈善市を開かんとす。

◎高等女子師範學校入學試驗、東京府廳に於て執行せらる入學志願者廿四名。

◎臺灣民政廳學務部長伊澤氏、臺灣に女子教育を布かんとす。然るに又兼松某氏の設立する大龍洞の日臺語學校には臺灣女子七名入學せり。

之を要するに本年の女學界の好況にありし事は、是迄女子敎育に口を閉ちたりし幾多知名の人士によりて、其奬勵振作說を聞き、また多くの新聞雜誌の婦人問題を論議したるとを以ても證せらるべし。數種の女學校は新設せられ、幾多の婦人會亦起り、殊に佛敎徒の婦人論屢聞えて、同主義の婦人會地方の數ヶ處に現はれしと、これまた注意すべきの顯象なりき。

補遺

◎一月の本誌上對外女傳道師養成の必要を論じ、佛教徒間、女子傳道師の養成を必要とするの議論、三四月の交に多く聞ゆ。

◎十二月廿二日從に白痴教育視察の爲渡米したる王子孤女學院長大須賀亮一氏歸朝す。

評論

宗教家の改革談

如雲散士

吾人は新聞紙の雜報に驚かさるるものにあらず、素と是れ道路風説の記載せられたるものに過ぎざれば也。新聞紙を讀むものは新聞紙を世界とす、故に其の一波一瀾に搖動せらるること、樹葉の旋渦に漂ふが如し。而も試みに隣房の新聞紙を讀まざる人に聞け。彼は毫も關り知ることなし、天下は依然として泰平なることを發見すべし。

世上閑暇の人あらば、請ふ近年最も多く使用せられたる文字の何なるやを調査せよ。吾人惟へらく、蓋し是れ『改革』の二字なるべし。何故に、改革の二字斯の如く愛重せられし乎。他なし、維新風雲の波動未だ全く治まらず、人々偏に流行を追ふの故のみ。何んぞ知らん、彼の連りに改革を唱ふるの徒は、必竟、維新の風潮の餘沫たることを。彼等大率、追隨雷同して自から知らざるの徒のみ。如今眞誠の改革は、即ち先づ此の流行を改革するにあることとなれり。

念思せよ、革命成就の機は瞬一轉の間にあらずや。喩へば電光の一閃するが如し。殆んど、現在あることなし。視るものは、只だ一歎息すべきのみ。人の擾々として論ずる時や、則ち既に過去の機勢となれり。

此を是れ念はず、只だ連りに、改革を叫ぶ。此の叫聲新聞紙に記載せらるるや、讀むもの亦傳へて改革と言ふ。改革なる哉、改革なる哉。世上普く流言するに及びては、既に改革の機過たり。又何んぞ其後の改革あらんや。無名靈覺の士、何處にかあるあり、既に夙く機輪一轉の秘密を了れり。而して後、世人只だ其の形跡を論ずるのみ。諸君寧ろ賀すべし、改革の事は既に了れりと。

茲に試みに世人に問はん、改革とは何事ぞ。答へて曰はん、革命改正これのみ。さらば見るべし、乾坤一擲新舊頓化の際は、眞に是れ機一髮の間にあることを。若し是れを哲士清論の上に改革とせば、機到り會熟するの時、金口を聞きて叫破する第一聲の發する刹那にあり。若し是れを英雄事業の上の

改革とせば、勢來り、運助け、人心微妙の感交正に中するの時、巨腕一斷して、疾風迅雷の功を即時に了する刹那にあり。此等の刹那や、即ち、改革絶頂の際。他は殆んど悠々時を迎へ、悠々時を送る、必竟春風三月の季節のみ。故に、眞誠の改革者は、多く叫ぶヿなし。一度び大いに叫ぶヿあれども、之を屢ばするヿなし。たとひ屢するヿありとも、こは即ち、前徴又は餘波にして未だ眞骨頭を悉皆露剝せざるの期なり。されば、後人、古への改革者に學びて、其の顯現揚發の事跡に眩し、之を以て彼の本領正功と誤認する勿れ。彼が眞に汗血を滴たらしたる所は恐らく別に存するあらん。何んぞ後世普通の紙に筆記せられて、所謂、傳記歷史なるものの中に收錄せらるゝほどの淺薄ならんや。

翻つて惟ふ。近來宗敎界の事、亦何んぞ改革論の騷がしきや。基督敎界にも二三年來連りに其の聲を聞けり。佛敎界に至ては、今や殆んど絶頂にあるが如し。亦是れ世間普通の流行のみ、必ずしも奇しむヿを要せざる也。但だ夫れ如此き手段によりて法界の改革遠からず成就せらるゝものゝ如く思惟する人士の多きに至ては、些さか歎せざるを得ず。

吾人は總じてこれ等の改革論の先づ新聞紙面に騷々しきを見て、早く其事の功少なきヿを看破せり。今の新聞紙たるもの假令ひ兎耳長速の技倆あるに由るとするも、各種法界の地盤未だ毫しも搖るがざるに、但只だ早やく新聞紙上の風評となるは、豈に改革事業の爲の好兆ならんや。もし新聞紙、讀者の好尙趣味を改革すべしとあらば、此手段恰かも可なり。殊に知らずや、方今宗敎界の最强なる地盤は、殆んど新聞紙と痛痒の關係なきヿを。一面にありては、其の太はだ高尙なるが故に關係なき也。他の一面にありては、其の太はだ卑俗なるが故に關係なき也。一は、新聞紙を重んずるヿなし。他は新聞紙を讀むヿなし。亦何の痛痒かあらん。

就中、宗敎界一般の改革なるものには、主として彼の所謂る愚夫愚婦、もしくは御同行一切の衆生と目すべき、普通の俗人を標的とせざる可らず。基督敎界に在りても、佛敎界にありても、もし今に方りて改革せざる可らざるヿありと揚言する以上は、即ち、此等通俗の信徒を目的として立案せざる可らず。もし之を然りとせず、否、神學論上の改革なり、否、法義宗論の上の改革なり、否、役者役僧に關するの改革なり

と言はば、夫も亦た可なり。但だ夫れ如此き改革が新聞紙もしくは俗的輿論の勢力によりて成就せらる可しと信ずるを迂なりとせんのみ。

法界、改革を任ずるの年少多きは慶事とす。吾人は之を感謝するもの也。たゞ夫れ感謝す、故に其の成効を希望するの主旨をもて、其の言行の太だ要緊に中らざるを惜しむ。語を寄す、今の年少法士。其の鬱勃たる改革論を隆んに演舌するに先だち、試みに三戸五家の、所謂る愚夫愚婦なるものに就きて、所信を叩き、假りに吾が慷慨する所を擧て、彼等の純白無垢なる信仰心に訴へよ。惟ふに、其の無邪氣にして堅固篤信なるに感じ、恐らくは呆然として君が改革演舌なるものの何處に反響すべきものなるかに疑ふべし。

古人曰く、道は邇きにあり、反つて遠きに求むと。今人は、此の黄金の言をすら遠きに敬して近きに用ゐざる也。抑そも、政治に古今の別あらんや、只だ凡俗の人情に合するにあるのみ。宗教も亦た今古の別あらんや、主として凡俗の信仰に合するにあるのみ。政治宗教もと俗界の事のみ、誰か一を擧て聖なりとし、他を貶して醜なりとす。同もに是れ俗事のみ。

俗事なるが故に救俗の慈悲心をもて運為す、もと豈に高尚玄々の事業ならんや。然るを是れ察せず、徒らに深遠超脱の理想を施こして直に之を事業に用ゐんへす。其の誤らざるは、殆んどあるとなし。

かの流を看よ。其の大元は白雲にあり。白雲凝つて高山の樹葉に隱れ、傳はつて根底に入り、涌いて泉頭に出で、之より溪谷を下り、之より飛瀑となり、之より樹下を透し、之より斷岩に激し、遂に洋々として田舍村里の間に流る。もし其の發源を究むれば、幽たり、遠たり、未だ容易に人生のものにあらずと雖ども、其の水事を轉ずるの動力となり、其の飯をかしぐの飲料となり、其の汚穢を洗ふの用水となる比ほひや、平野廣原の間だに遲々として何んぞ其の觀の俗なるや。惟ふに、大人法士の俗界にある亦如此し。其の俗界にあるは、素と救俗の爲のみ、何すれぞ俗に混じて大俗とはならざる。既に大俗となりて、何故にかの愚夫愚婦を主眼第一の標的とはせざる。

大人法士の樂しむ所は、かの白雲悠々の境にあり。大人法士の求むる所は、かの孤鶴鳴々の境にあり。其の俗然として事

業に奔るの時や、豈に此に本懐を置かんや。たゞ慈悲をもて願ひとし、救濟をもて務めとなす。もし能く此の消息を解するものあらば、彼等が所謂る改革なるその極めて太だ通俗卑近なるを見ん也。何んぞ今の新聞記者先生に稱揚せらるべきものならんや。然るを素と新聞紙を當にしての改革論を唱ふ、其調の迂遠にして、其聲の徹底せざる當然也。

夫れ、神學宗義の上に改革する所あらんとせば、須らく幽遠閑寂にして、知己を天下少數の士に待つべし。役者役僧の上に改革する所あらんとせば、須らく隱忍靜迫して、一刀兩斷の瞬速を期すべし。もし夫れ法界の最多最强の地盤を改革せんとして、所謂る一般信徒の爲に爲さゞる可らざるの事業ありとせば、須からく、其聲を俗にし、其論を俗にし、其調を俗にして、大俗をもて大理想とすべし。抑も、法士改革の聲を聞くこと多し、蓋し其の聲は何をか求むる。吾人些か之れを審にすること能はず。

灯火の言葉を咲かす寒さかな。

大和心

女性の修養

曉　莽

をとこ女によらず、修養をまをすこと、大事にて候。修養は、敎育の起頭にして、また、その結尾なめり。よろづの敎育は、修養の料を得しめむための準備に外ならずかし。修養とは、みづから敎育するの謂にして、あるは、他の錬習を受くるにより、あるは、他の感化に浴するによりて、もしくは、有意識的に、もしくは、無意識的に、修養を得、または、修養を資くべき途なきにあらねど、みづなら修養する、すなはち、みづから敎育するをもて、修養の主なるものとなし、修養の本意、こゝにありとせざるべからずとこそ存じ候へ。

修養は、敎育の起頭にして、やがて、結尾なるは、前、すでに、いふがごとくなれば、修養の範圍は、やがて、敎育の範圍とおなじ理なり。ゆゑに、その目も、また、これに叶ふになむ。されば、修養の目は、智、情、意の三となすといふ

の箇にして、盡くせるにしかざめり。されど、こは、人たるものゝ、誰彼となく普通、具足せざるべからざるものにして、この外、その習ふところの技術に從ひ、攻むるところの學藝に應じて、修養を要するは、これを、特殊的の修養と名くべし、また、おなじく、智、情、意といふも、男性と、女性と、その趣に、多少の差異あるは、免れぬところなめり。かく、合點して後、女性の要すべきものを擇びたらむには、掌を指すごときものあらなむかし。

いま、智の修養につきていはむに、なみ／＼の學校にて家政學などの敎授するさまをきくに、あるは、空理に趨り、あるは、實際になづみ、その中庸を得ぬが多く、またいたづらに中庸の道を求むるに急にして、かへりて、中庸に反するもの多かるは、くやしからずや。ちかごろは、反動の勢にもや、實用をむねとするが多しときくも、もと、生理、物理、なによらず、普通の原理原則を辨へたらむ後にこそ、實用をも解得し、適用など語るべきも、原理を後にして、適用を先きにするは、智力の暢發を能くすべき所以の途に非ずかし。原理の實際に行はれぬるさまを、見邊に觀察し、しかと、心に會得せしむるは、極めて、必要のことならん。たゞ、敎育家は、原理と、實際との兩端を示して、しかと、こゝろに合點せしむるをつとむるにとゞまり、これを、こゝろに會得し、自己の觀察により、自己の思想もて、事物の何たるを辨ふは、受敎育者にありぬべし。ゆゑに、おのれ、みづから、その師傅にきけるところを應用し、その、觀察力、思索力を修養するをもて、受敎育者の任務とせざるべからずかし。これを智力の修養とはいふなる。おほかたの、家政科が、その實効を奏せぬは、敎授のしかた、よろしからぬにもよりなむが、しかも、生徒の修養に謬ぐるところある罪、淺からずとこそ覺ゆれ。

情意にいたりては、もとも、ふかく求めまくほりす。そは、情意の修養は、道德、および、靈性を包含し、ことに、靈性の修養は、他の、すべての修養の母にして、われらが、うきふし繁き濁世の累を蟬脫して、たゞちに、これ、神人交通の一路たらまし。

情の修養とは、美の修養にして、意の修養は、善の修養なめり。美といひ、善といふがごときは、他の智識に於けるがご

とく、いにしへの書籍により、または、ひとの說話にのみ從ひて、前人の糟粕を甞むるも、なにかせむ。われらは、たゞに、美、もしくは、美の反射をかいまみ、善の反響にみゝだてゝ、美や、かくのごとく、善や、こゝにありと誤り安んずべきにあらず。まことの美を得て、これを、おのが掌中に握り、まことの善を求めて、これを、おのが身につけでは、なにのしるしか、これあらむやは。

なべての修養は、おのが。精神の根底より、かくれたる玉をさぐり、ひそめる黄金をいだすがごとく、たゞ、靜思工夫のほかあるべう覺えねど、また、技藝の練習より入りてしらず〳〵、精神に渾融し、一旦豁然として、われしらず、その妙境に達しぬべき途なきにしもあらずかし。さきに『女學雜誌』に見えたる『女禮談』のごとき、よく、この間の消息をもらせりとやいふべき。茶道、香道、挿花、諸禮式、いづれか、この不可思議を具せぬものなからざらむ。おほよそ、わが、日の本の諸技藝は、精神を先にして、形體を後にせぬぞなき。さあれば、その形式をしたひて、ふかく、このみちに入りなむには、自然に精神に融合して、技より進むてふ境界にいたりぬべし。これぞ、不可思議の解脱にしあなれば、自力にもあらず、他力にもよらぬ一種の妙力にして、われらが、特有の法門ならめ。されば、われらの、後進をみちびかむには、まづ、この法門を開き、よこしまなる路に迷はしめぬやうこゝろせざるべからずかし。氣品たかく、ろう〳〵しからむことは、みづから修養して、いたりぬべきものにして、助けて苗を長ぜしめたらむごと他よりしうべきにあらず。且、わが、日の本にて、貞節てふ思想は、たゞ、一夫一婦の理法に出づるにあらずして、貞道の甚深微妙は、大地とともに廣く、九淵のはかるべからぬがごとしとぞきこえし。修養の女性に切要なること、いはずもあらなむ。

一葉女史を傷む

波濤

文壇の一葉女史を喪ふは、その憾、倘、償ふべきものなきにしもあらず。已れ、一葉と、相知るは、狂言綺語の材をもてにもあらず。一葉の名は、狂言綺言の材によりて現はれ、一葉の可憐なる、うら若き晩年は、狂言綺語の材もて、其衣糧を

支へたるにもせよ。一葉の精神、果して、此に在しか。嗚呼、果して、此に在りしか、そを知るものは、恐くは………」

波濤觀音の畫像は、世、また、稱して、一葉觀音といふ。一葉の名、それ、こゝに取れるか。世に、梧桐の一葉に、秋風搖落のあはれをかこつもの、あるは、これあらむ。誰か、彼が、一葉身を現じて、無邊誓願度の精神を寄せむとせる、方廣大なる心胸を窺ひ得んものぞ。

楊柳街頭夕日春。白山祠下記相逢。諸行不耐無常甚。膓斷祇園寺裡鐘。

他、諸作は、情の至り、悲の盡くるもの、今、しるすに、しのびずといふ。

うき世をば、しのぶ習の、なかりせば。
いつくを戀の、かくれ家にせむ。

あはれ、この歌も、いまは、あだとなりぬ。

山路落葉　頼政

木の葉ちる山路の石は見えねども
なほあらはるゝ駒のつま音

教育

獨嘯教育界

開發的

『開發的』の語を連りに呼ぶものも、必竟は注入せられしのみ。本來適宜の楷段を經て、正しく十分なる識悟を得たるには非ず。抑も開發と注入とは二にして一なり、只だ其の傾向に就て異名を附すれども、詮ずる所は、同一の本體に寄せたる左右表裏の符號のみ。之を譬ふれば、陰と陽と、積極と消極と、進化と退化との如し。今の論士容易く辯ぜず、徒らに開發々々と揚言することそ痛ましけれ。よし左らば、開發的を此上なき眞理なりとも見よ。而も倘、之を目して維新舶來の新原理の如くに言做すは、恥かしからずや。王陽明、中江藤樹の如き、旨として此の教育法を採れり。今の團十郎子の教育すら亦之れ也。他の豁達にして成効せる師匠は、三味線氏に至るまで皆之れ也。何の珍しきとかあらん。

敎育法を開發的にせんとするに先だち、先づ敎育制度を開發的にせよ。維新前の塾舍の制度と、今の學校分級の制度との間に、何等の連續ありとする乎。誰か斷言して、之を開發的に成長したる學制なりと辯ずるを得るや。語を寄す、文部要路の先生、もしくは、堂々たる師範當局の講師。公等が採取適用したる順序は、開發的にはあらざりしならずや。

人才登用

敎育界に人なしと歎じて、人を養成せんと言ふ、抑そも迂なる哉。巨木の鬱然として天空を摩するを彼の山夫の手に委棄しつゝ、忙々然として苗を引いて其速かに長ぜんことを祈る。今の敎育界は、小池を攪動して、土泥を擧るが如し、呑舟の魚、玆に入るに堪へんや。偶たま非凡秀異のものあれば、囂々として簇がり刺す、宛がら漁人が大鯨を捕へんとするが如し。亦た一幅の滑稽畫ならずや。

文部大臣

文相の事他あらんや。恭謙、士に下りて、巨人を敎育界に誘引するにある耳。文士聖賢の書に對し、若くは天地宇宙の眞善美に對して、其道を説く。彼等が書生に臨むは、王侯の尊よりも尙尊かるべき也。然るに、文相之を敬することを知らず、只だ屈然として自己に恭しからんものを好む。如此して烈士何をもて文部省治下の敎育に從事せんや。今の敎育界に人なしと言ふは、人無きに非ざる也、人を逐ふの故也。

官吏養成

官立に係る大學校卒業生の自から官吏と爲り易きを罵り、大學を指ざして官吏養成所と云ふ。斯く言ふもの〻得意がるこそ心得ね。今の大學は、古の聖堂なり、之より官吏を登用するは、勿論の事に非ずや。論者切りに學風の獨立と云ふ。然れども、政治の方針に合はざる學風を好まざるは、如何なる政府と雖ども皆な然り、之を喧ましく論難するは野暮の至りなり。何んぞ更に根本に付きて論ぜざるや。

一校の長

苟且にも一校の長たらんほどのものは、眼識、大躰に通ぜず

んばある可らず。凡そ、學校より大才の出でざるは止むを得ざることながら、大才も亦た一度びは學校の門をくゞることのあるもの故、切めては之をこぢらして、其の才の大を害ふやうの事なからしめたし。校長たるもの達觀なかる可けんや。熱は可なり、盲熱は不可なり。一校はこれ一世界、之に長たるもの第二の造物主たらずや。一校はこれ一天下、之に長たるもの第二の君主ならずや。何ぞ偏局して、かの一部に拘泥せんとはするぞ。

教育を輕んずべし

民間教育者中、第一指を屈す可きは三田の老先生なるべし。三十餘年不羈獨立、卓然として時流を抜く、固より熱性あるにあらずんば能はざる也。而して、其の教育を語るを聞けば則ち曰く、學校教育何ほどの價値ぞ、たゞ人を惡しくせざれば可なり。慶應義塾の大學何ずるものぞ、校資十万は速に遣ひ切るとも可なりと。夫れ、教育の輕んずべきことを知るものにして初めて同もに教育の重んすべきことを談ずべし。かの教育をもて無上唯一の神聖事業の如く見做し、我爲す所の事業のみ國家に有益なりと獨斷する學校先生の如きには、可成吾子を預けたくなしと思ふ。此子の受る所は偏矯のみなれば也。但だ悲しむべきは、此丈けの自信ある先生すら今は寥々たること也。

氣節慷慨の教育

氣節は人の骨髓なり、慷慨は人の火炎なり。人、男女を問はず、此の二者を欠ぎて何の活力かあらんや。活力なき輩は、國家の生命、天下の文運に些との增減あることなし。生くるとも死せるが如し、何んぞ論ずるに足らん。

然れども、所謂る氣節慷慨の教育を受けたる男女にして、實際に邦家世界の大事に益せしもの、古來果してあるありし乎。仔細に見よ、大事を誤まるものは、多くは、此般熱血あらしきの族なり。吾人密かに思ふ、我國を誤まるものは、夫れ忠臣か、夫れ愛國者か。

凡そ眞に氣節あるものは外貌極めて優美なり、眞に慷慨するものは容易く語るものに非す。かの所謂る氣節慷慨的教育を受けたる男女の如きは、必竟、製造せられたるもの也。

もと自然にあらず、こゝをもて直ちに狂激す。もと自得せるものにあらず、必竟は克己なきの變形なり。此輩に大事を談ずれば、大事の端緒未だ解けざるに早く既に破れん。笑止なるは、近來の國家的敎育とか云ふもの也。古へより眞に國家を思ふものが國家〱と言ひしとはあらざる也。

◎福澤翁の敎育論

福澤翁去月信州に入りて、長野師範學校に其敎育演説をなしたり。其説の要は、近來の『福翁百話』の説く所に等しきを以て、吾人は爰に後者に就て翁が敎育論をきくに、翁は敎育の過度の決して恐るゝに足るべきものに非ずして、今日でこそ、近世の敎育を受けたるものは、生意氣となりて、田舍に歸れば近郷近在に珍重せられて、自からも增長するかなれど、今より二三十年も立ちなば、人文の普及と共に、其時の後進生が生意氣に學問のことなど語りても、尋常一樣の事として左まで珍重するものもなくならん。既に學問したりとて世間に珍重がられずば、百姓は百姓、町人は町人にして、銘々に家業を營むの外に渡世の道はあるべからず。唯その營業上に少しにても學問の思想あれば、事物の道理を解すること易くして、多少の利益あるべきのみ。世間の敎育普くして度に過れば、人民自然に賤業を嫌ふなど云ふは、あられもなき空想にして取るに足らず。今日の敎育の弊は敎育過度の罪に在らずして、敎育未だ普からざるに在りといへり。翁はまた敎育の價は必ずしも高からざるを説きていはく、公私の資金を費して、果して之に酬ゆる丈の功能あれば、敢へて愛しむには非らされども、學問修業者の平均數を計ふれば、唯費すのみにして、所得未だ滿足ならず、敎育は割合に價の高きものなりとて、不平をいふものもあれど、其實今敎育の價を評して高しといふは、敎育の高價なるに非らず、金の價を評すること高きに過るものなり。敎育の功能も存外に廣大ならず、之れに費す資金も亦存外に貴重ならず發明したらば、不平はなき筈なり、況んや身に付きたる知見は損亡紛失の掛念なくして、身外の資金は消えて痕なきの例、多きに於てをや。公にも私にも子弟の敎育に錢を愛しむ勿れと。此説をなす時兼て拜金主義よと世評せられたる福澤翁が貧富は唯有る時にあるのみ、富貴浮雲の如し、浮世の人が財產を貴重なりとして、之に思を焦すは、自から理由なきに非ざれども、其實は遺傳の性質、社會の習慣に制せられて、一心一向に金は大切なるものなりと思ひ込み、遂には其大切なる所以の理由を忘却して、理由外に之を拜む者こそ多けれといへるは、これぞ實に翁が拜金主義以外に巖然たる立脚地を有せるの眞面目を露呈するものに非ずや。然るに翁が此眞面目は、多く其門弟子によりて誤解せられて、千万の徒弟中遂に翁の衣鉢を繼ぐに足るもの少なからんとするを遺憾に堪へず。

◎府下の二大敎育會

去月中、府下の二大敎育會なる大日本敎育會及び國家敎育會は其の總會を開きたり。其結果大日本敎育會は辻新二氏其會長職を辭して、多望なる近衞公爵其跡を紹ぎたりとて、敎育界は公に向つて大に希望を囑せり。此二敎育會は先頃合同の風説ありしも、一時立消えの姿なりしが、此頃に至りて其説再燃し、合同成るべきの見込みあれども、なほ合同後の會の名稱の事、恩賜の土地の事などの些細の事に關して、兎や角いひあへり。我邦敎育界の牛耳を執れるこの二大敎育會の、些細の情實に拘泥せずして、一致合同を遂げ、而して近衞公を以て此中央大敎育會の會長に推し、其旗下に在りて活潑の運動をなさんことは、今日敎育界の一般に希望する所なり。

此合同議あるなしに拘らず、大日本敎育會に在りては、俄に生氣を擧げて、活潑〱の運動を試みんと稱して、第一に是迄の『大日本敎育會雜誌』を改めて、『敎育公報』と名け、月二回の發行となしたり。併し其既刊の分を取りて之を見るに、格別の生鮮活動の氣の顯はるゝ處を認むること能はず。然れども、吾人は同會の遺骸には文部大臣の候補にまでも推されて、我國敎育社會の人望尠からざる近衞公爵に戴いて、會長となすを得たることを賀し、且つ同公今後如何に此大敎育會を率ゐて如何なる運動をなすかを刮目して見んとす。

◎學生の罪惡

學生風儀の衰頽をいふの聲、やゝ喧しきに至りて、國民新聞に昨年の下半季より、本年の上半季に至る一年間都下學生間に起りし罪惡の件數をば、新聞紙雜報欄内より拔萃して統計したるもの出でゝ、江湖は更にまた如何に學生の風儀の衰頽せるかに驚かんとす。其表なるを見るに左の如し。

娼妓に惑溺して學業に荒みし者	三七	處女を誘惑せしもの	四二
情死(相手娼妓に多し)	一二	詐僞取財	二五
殺人犯	三	其他	二六
有夫姦	五		

然れども此統計なるものは、決して學生風儀の衰頽の進歩を證するものとしては見るべからず。また現今學生社會の有樣の一端をも窺ふに足らず。都下數万の學生中にて、一ヶ年中僅に百五十人の罪惡者を出したりとて、それが爲めに大體の上に於て、俄に驚くべき事にもあらざれども、學生の風儀の一般に良しからぬ傾向を有せるとは事實なるが如し。併し社會の風儀夫自身が、一體に良しからぬ方向に降沈しつゝあるとなれば、獨り學生の風儀の如何をのみ責むべきに非ず。

◎學生の風儀

吾人は前々號に於て『學生風儀の衰頽乎、教師風儀の衰頽乎』と題して、獨り今日の如くに學生の風儀の衰頽をのみ難ずべきに非ず、教師の風儀も甚だしく衰頽し居るとなれば、大に之を攻擊せずばあらずと論ぜしが、一方よりいへば學生の風儀の現狀は、教師も持て餘せるものなるべし。文部省にて、某の書は厭世主義なり、某の書物は男女の間をいへり、されば之れを學生に讀ましむべからずと制限したりとて、非難するものもあるかなれど、實際學生自身に情交などの高尚なるをなどの解らぬは勿論の事なれど愛だの、戀だのいふ字が見付かると、教師の目の前もかまはずヤンヤと囃し立るが神田の私立學校あたりには多しといふが、たゞに夫れのみならず、書生の狀態が一般に如斯にてはなきか。さても驚き入つたる外なし。また學生一般に倚武々々といひ立てゝ、運動のよく出來るものが一番に威張り、勇氣々々と稱して、職人や土方と喧嘩するものもありとか。文弱に流るゝも困つたとなれども、また武勇に荒むも困つたものなり。兎角今日の學生の惡風は、罪の歸し所、教育の宜しからぬが爲といふより外なき次第なり。

◎學校の價値

我家の子は、もう今年は大學とやらを卒業する故、其後は、これまで當人を見てやつた代りに、此方を見て貰はなければならぬ、これからは少し寛待に出來るとかと思ふと、父兄が學校の價値を買ひかぶりたるが爲めの申條なれば、なほ致方なしとして許すべきかなれど、苟も教育家ともあらん者にして、彼父兄と同じく、學校の價値を買ひ被り居るものゝ多きぞうたてき。學校の價値たる、人の思ふが程に大したるものにてはなし。大學を卒業したりとて威張るものもあれど、さらばどれ程の事の出來しかといへば、たゞ尋常中學に五年、高等學校に三年、大學に三年の年數をかけて、其間に夥しき金子を費して、何百何十卷の書物を讀んで、某の事を覺えた迄の事、而して教育の大目的たる、人生の開發修練に於て、何程の事の出來しかといへば、極めて些少にて、偖て是から即ち眞の學問にかゝるとにて、此迄の所は、たゞ社會に出てゝ漸く獨り立ちの出來る途の開けしのみに過ぎざるなり。人間教育の大目的は、たゞ其初幕を了へたるとにしか過ぎざるなり。さるを教育家の一にも二にも學校といひて、教育は學校の内にて最大部分の遂げらるゝやう思ふは、甚だ誤たることなり。彼等のなほ更に大に達觀の眼を開いて、學校とは、存外に價値のなきものなることを知らんことこそ望ましけれ。

◎英國教育の現情

奢るもの久しからず、今や大英國も將に農工業に於て、步を須臾く、他國に讓り、その榮光の冠をすてざるべからざる一大危機に迫まれり。農作業の如き、既に早や大に衰ふるものありて、パン及び食肉の類多くは外國の輸入を仰ぎ、蔬菜バタ鷄卵の如きも、フランス、白耳義、和蘭、丁抹、諸國の力によらざるべからざるに至れり。之を救ふ復本位制に如くはなしといふものあり、然れども未だし。之を回復する保護貿易策に如かずといふものあり。然れども未だし。もしこれあらば、たゞ其教育事業を振作するの一事ならんかな。

爾來教育制度の革新を唱ふるもの多し。然れども、これたゞ僅に一黨一派の勢力を張らんとするの政略に過ぎずして、未だ誠意誠心、眞に國民の前途を思ふて、之を企てたるものあらず。かの農工業に非常の衰運を來たせるもの、蓋し全くこの教育の減退に基せりといふも不可なけん。大英國の勞働者今や教育あるもの少く、初等教育は遍く全國に振はず、大英國民の大多數は、乃ち死の陰を歩みつゝあるものなり。

而して教育の効果の國民に顯はれずして、不振の最大原因をなすものは、兒童の小學時期大に短きものあるの致す所とす。今や漸く玆に覺る所ありて、在校時期を満十一歳に引きのばすに至れりと雖ども、其以前にありては十歳に至れば、敢て在學を强ひられざりき。又近來少年の勞銀大に騰貴し來れるより、其父兄は長く子弟をして在學せしむるを希はず、未だ齢を重ぬる豐かならざるに、校を出して勞役に從事せしむ。如何でか之に滿十四歳を學校教育の間に迎ふる、獨逸瑞西の少年に加ふるが如き高等なる職工農事の智識を與へ、以て之を善良賢明機敏なる工人農夫に教育するを得んや。是に於て、彼等はたゞに古來の習慣法に戀々たるのみにして、科學の教ゆる處を蔑り、以て得たりとなすの愚物に終る。之を以てして如何ぞよく、日新理學の智識を貯へたる外國の職工農夫と競ふを得べけん。是に至りて、大英民の愚何ぞ邦人と擇ぶ所かあらん。

幼稚園保姆合唱の歌

華族女學校長　細川潤次郎作

（一）幼稚の園生はいかなるそのふ。こゝろに千草の種まくところ。蒔きては培ひ月日を經なは。色香も妙なる花こそ咲かめ。

（二）長閑けき春への風をも吹かせ。静けき春への雨をも降らせ。二葉のなてしこ榮行く園生。まもるも嬉しきこの身の勤め。

随感

○虚靈自照不勞心

無意識、不勞心の秘密を味はひ、須らく先づ本躰の修養に全力を皷すべし。本躰未だ成らずんば、何によりて事物に應ぜんとはするぞ。拘々然として、執着迷惑し、絶えて不用意無想念の趣味あるとならば、其人や未だ靈覺を語るに足らず、抑そも論ずるは愚なるのみ、相ひ默契せずして如何んか相ひ悟らん。一見舊識の如しとは、單に其交道を言ふにあらず、亦た其の思想を言ふ也。

○未曾て名士を見ず

人の相知るは、必らずしも之に交はりたるが爲にあらず、必らずしも其の情態を知れるが爲にあらず、未だ曾て其風采相貌を一見せざるに、早く既に其品操を感得するとの爲しがたきにはあらざる也。畫人の聖者を畫や、周邊に光を發つ、惟ふ

に人々皆な一道の靈火を揭げざるはあらず、若し達人ありて虚心平氣に四方を大觀しつゝあらば、あらゆる名士の人と爲り歷々として自から眼底に映じ來るを覺らん。人心幾微の影響は、池紋の小波を動かし、樹葉の細風にゆるぐにも尙ほ優れり。靈囊の士、此邊の修學なかる可けんや。

○非情の情

お柳又は葛の葉の心根を推し測りて、誰か斷腸せざる。野狐老木にして思ひを人間に通はせ、言語不自由の關山を超えて、至情同穴の語らひを爲さまく欲す。若し夫れ義理切迫して、多恨百年の別離を遂げ、可憐の姿を脫して依然たる非情界に隱れんとす。むかし漢の美人は、死に臨みて、やつれし姿を愛着の帝に見せざりき、合ふとのうれしからぬにはあらず、厭れんとの心苦しき也。野狐老木にして其素性を顯はさんとする時節の苦悶察すべき哉。腸九廻して、戀恥身を燒き、遺恨千年に徹して、理想の義一身を縛る。而も、可愛の玉兒を棄て人間界を離れんに、吁返んか、往んか、去んか、留らんか、願らくは絕命絕躰の死の神、即座に吾を亡ぼしつくせ、而して永遠に生命あらしめ玉へとや祈るらん。

○死別生別の思

人生『死』と云ふものなくば如何に幸ならんと思ふは、一と通りの理りなれど、其の苦がき經驗に切ても慰藉を得たらんものには、人生死別あるの福音も大方は推し得らるゝなれ。夙に思ふて其の苦しみを忍べば、淚胸に滿ちて、同棲の幸を感謝し、木の葉落ち、花しぼむの邊、相伴なひて假寓の緣を慶ばんとす。不幸にして後れ先だつとのありとも、若し能く思ふて固く慕ふの心だにあらば、人影婆娑として風前燈後にあり。不斷心裏に往來して姿を認めずと云ふとなし、亦何んぞ其の血肉の存せざるを恨まん。寧ろ感謝す、わが世界は幽明の二つに渡れり、幽界ことに知己のあるあり、甚だ比隣の心地を加へたるとを。

○根本的改革

騷々しき改革論者の十八番か、盖し同一の警句あり、曰く、根本的改革と、多年之を揚言したる輩儕の果して能く之を實

行せしを見たるものは尠なし。此頃、宗教家亦た往々にして此の常套語を使用す、曰く、吾宗教は根本的改革を為すもの也と。之に其説を聞けば、歐米古今の實例を擧げ滔々として盡さゞるとなし。但だ惜しむらくは、辯者自己が人物品性の果して之によりて根本的改革を了はりたるや否やの實證なきと是れ也。凡そ近來の議論證を遠きに求めて之を近きに忘るゝの例、大率此の類なり。

○歸天齋正一

歸天齋正一の奇術を觀るもの、皆其妙々不可思議なるに驚歎す。正一、時として、其術の秘訣を見し、云々の筋道にて云々に運爲すと言ふを聞けば、正に是れ尋常の手段、當然の人事、亦た何等の奇、何等の怪もあるとなし。既に、其の筋道を知れり、左らば、何人も能く正一たるとを得べきかと試みに之に倣はんとせば、則ち依然たる門外漢たるとを覺らん。看るべし、理を知るは未だ眞に知るにあらず、自から知れりと感ずるも未だ眞に知れるにはあらざりしとを。世の所謂る學問なるものは、單に理知に過ぎず、人未だ自得せずんば、遂に何の益あらんや。

○忝なさの至情

天地間に具眼の主在す、慈悲にして靈驗ありと信じたる此方、弱き時、強く、謙だる時、勇ましく、足らざる時、餘裕あるこそ忝なき極なれ。左なくんば、不束にして益もなく過す可かりし我一生の些なりとも公に用ひらる可くなりし、厭世主義にして効驗を見るにあらざれば益なきとの樣に思ひし我狹き胸の稍や洞開したる、抑そも誰の賜物ぞや、裸躰にして生れたれば、裸躰にして死するも可し。土泥より出でたれば、土泥と化するも亦可し、凡べて一切の所有のもの、抑も誰の賜のぞや。思ふて此に至れば、感恩の情盡しがたし、抑も如何にして此の忝なさの情懷を述べん。誰か言ふ、祈禱は求むるなりと、余輩の祈禱は即ち感謝するのみ。匹夫、聖壇に近づきて直接に言上す、何等の光榮ぞ。賜はらんとを祈るにはあらず、たゞ與へられし特權を履みて神前に陳謝する耳。

雜録

秋風辭

隱花生

殺氣地を捲き來たる、何ぞ其れ壯んなるや。紛々たる朽敗、枝を辭し根を謝して、去りて其之く所を知らさるなり。吾、朝に階前に看るに、紅桃春に笑み、白菊秋に薫ず。又、暮に天外を望めば、富峰長へに崇かく、銀河長へに寒むし。生者必ず死するが如くにして、而かも曾て死せず、此世常に衰ふが如くにして、遂に亡ぶることとなし。

又、誰れか陰府を此世に索めて、而して之を得たる。又誰か樂園を彼蒼に尋ねて、而して之を得たる。樂園我を去らず、陰府我に來たらず、衰亡嘗て此地を犯さず、榮華暫らくも此地を離れざるなり。

觀よ、霜下早に新綠を藏し。寒梢亦已でに洋々の春あるを。

噫、此不朽。以て我生を托す可き哉。

貞操觀

青柳有美

世間美人多し才女許多なり、つぶさに之を調ぶれば、其間豈に己が妻に優れたる大美人啻これなからざらんや。己が妻豈に才德識智に於て、天下の女人に冠たるものならんや。然れども一旦之を呼んで妻となし、自ら呼ばれて夫たるに至らば、その人や常に其眼を閉づることとエロスの神像の如く、三千世界あま女房多しといへども、己が妻を措て他に一人の佳人あるを思ふべからず。是れ即ち男子其妻に對するの貞操なり。』

世界は廣し、丈夫の雄々しきもの、智慮にたけたるもの、千を以て萬を以て數ふるに足らん、以て夫とすべく、以て一生の好伴侶たらしむべし。然れども郎君を撰んで、我が天となす、千萬の君子英傑、あれども無きが如し。某の君其人に勝れて情けあり、某の殿御前、其智德財寶に於て、我が夫に勝つものあり、乞ふこの所を去りて、彼所にゆかんといふ如き、是れ輕薄者流の往々爲す所にして、こは貞操を亂るとの甚しきとなり。誰か此る水臭き仕打に滿足を表するものあらん。

然れども、世の人多く貞操を以て、男女夫妻の間に限られたるものとなす、蓋し誤れりといふべし。貞操何ぞ必ずしも、情郎情婦の間にのみ限らんや。人たるもの須く其業務に對して皆な貞操あるべし、人の一事を撰んで己が業となし、身を之に委ねて、其事に從ふは、これ即ち其業務に婚嫁せるなり。然るに其後に至りて、之に優りて利益あり、己に適應せるの業務ありとて、直に之を去ること弊履を捨るが如きは、宛がら貞操を解せざる儕輩の獸行とやいふべき。この輩これ朝に呉人に嫁して夕べ越人にゆく、淫婦に等し、之を稱して事業に淫するものといふ、敢て不可なけん。貞潔の心あらん人は、其取る所の盛衰に眩せられず、身を以て之に殉し漫にその職を換ふるべからず。是に於てか、人生の業務を取る正に先づ深く慮り豫め究めざるべからざるの所以あるなり。婚嫁のこと、若し人生の最大事ならば、事業の撰擇またこれ人生の一大事と知らずや。青年男女學生の一校を撰んで之に入學する、これまた其校に嫁せるに同じ。生徒たるもの、宜く我校に對して貞實なるべし、妻の夫を敬し、夫の妻を愛するが如く、その校を愛慕敬重せざるべからず。愛校心なきは、

なほ夫に對して余所〱しきに等し。天下學舍多し、その器械に於て校舍に於て、將又敎員制度に於て、我れに勝れるもの素よりこれあらん。さればとて、之を棄て、彼に遷るは、我が夫愚なりとて、見目よからずとて他の男を迎ふると何の擇ぶ所かあらん。之をなすこれ水臭きの甚しきものにして、豈に稱して貞操あるものといふべけんや。敎師の任を或る學校にとる、又これに等し。既に一校に入りて、その敎職にあたる、身を以て其校につながれざるべからず。經典に錄して、姦淫のゆゑならで、其妻を出すべからず、これをなすは姦淫を行ふなりと。其校の何等我れに向て不義不道を逞うし、我をして人たるの顔なからしめたるにもよらず、たゞ一片の嫌忌心に支配せられ、或は他に俸給多き所あるのゆゑを以て、己が在職の校を去るが如きは、實に自ら姦淫を行ふに等く、亦斯る不德の敎師先生を雇ふの校舍も、ひいて不德の譏を免るべからず。されど今日の社會此種の淫婦的敎育家多きこそ悲しけれ。殊に怪むべきは、社會今日の風習が、敎師の交迭を以て、悲しむべきの一大事となさず、政府數々また之を行ひ、恬として恥ぢざるの一事なり。

これ則ち人をして其徳を破り貞潔を汚さしめ、人生自然の趨勢に戻るものに非ずして何ぞ。有夫姦を罰する、法律に刑あり、而して社會と政府とは一種の有夫姦を人間に強ひつゝある亦奇ならずや。而して曰く、貞操の要、女德の衰頽と。社會の厚顔も茲に至りて極はまれりといひつべし。

愛國心またこれ貞操の一態なり。われ命を天に受けて、某の邦土に生る。其文化必ずしも、天下無比のものに非るべく、それ或は僞悪醜の塊其間に隆々たらん。然れども、之を思ふて完全無欠のものとなし、之を外人に驕り其暗黒面をかくさんとするは、これ妻の尙ほ夫の欠點弱所を他人稠坐の前に公にすべからざるが如く、覆載の間他に一人の男子ありと思ふべからざるが如く、將に國人たるものに盡すべきの義務なりとす。古今未曾有の醜婦も其夫たるものゝ眼よりしては、小町、クレオパトラを凌ぐの美人と見ざるべからず。己が妻を以て天下比ひなきの醜婦と覺る、一刻も共に住ふべからず。此の如く、黒人、インデヤンの蠻風も、將又ポルチオの禽行獣作も、其民は以て上なきの文明なりと思ふほどならざるべからず。己が邦土を以て世界の掃溜禽獣の住國なりと思惟す、一日も足を其の地に止むべからず。故に一言にして之を言へば、己が邦土に自惚るゝの心なかるべからず。自惚心豈に必ずしも排斥すべきものならんや。自惚心は貞操を全うし、人間の美德を保全せしむるものなり。天の人間に自惚心を與ふ、抑々所因ある哉。男女の關係も、師弟の關係も、臣民の關係も其自惚心を待て始てよく純潔たるを得。嫉妬の愛情になかるべからざるは、古來説あり、されど靜に之を考ふれば、嫉妬又遂に自惚心の變形たるに過ぎず、故に以爲らく、自惚心一日もなかるべからず。自惚心なくんば、貞操遂に其影を絶ち、戀愛なく、愛校心なく、業務に對する一徹心なく、愛國心なく、師弟の連環も亦なきに至らんと。然るを論者近頃往々にして、己が邦國を以て最美のものなりとなすを罵り、之に對する自惚心を減殺せしめんとす、誤れるの甚しきものにして、楯の一面を見たるものに過ぎず。憐むべきは、此種の躍起黨に與みして、邦國の非を發き、相顧みざるの儕輩なるかな。

之を約言するに、貞操は人事百般のこと〴〵に接して、常に顯はれざるべからざる、先天的なる人間の美德にして、自惚

心は、これが完成に欠くべからざるものなり。

髑髏

井口子

有限の姿の名殘をとゞめ、無限の旅寐にうまいして、寒月風寂びし松秋の影に跳る。獨り世外の月に嘯き、物外の花を眺め、昔し在りし世の夢は忘れで、塵に蠢めく衆生を愍み、正覺に迷ふ狂者を悲しむ。汝、髑髏よ、なが一片の冷めたき姿には、猶子よ夫よ妻は何處ぞ。幽なる音に君樣まゐるの哀れを刻みつ、ひたすら戀に痩せ、戀に碎かれつ、情に悶え思ひに死せしいのちの程も知らるめり。滿山の花を思ひ遣りては嘗てなが五十年の道場に一さし舞ひ出たる、自在の劇も再ひ見たく、戀と色との舞臺に迷ふては、三十年煩惱の羈に繋がれし、粹の魂膽ます／＼聞きたし。バイロンか排悶の酒に、人世をして無味の者よと悟らしめ、一休が御用心の杖に叩かれて、有限と音せしも理りや。西行か可憐のわざくれに無限の衣は強られて、聲は破れたる笛を吹やうになん侍ると云はれけん。遮莫、淺茅か原の薄、そのとはいはであなめ／＼、尾花か袖の招くを見ては、榮枯盛衰の定めなき、おのづと無限眞如の懷、戀しと慕ふまことや。髑髏の哀れなる、小町も汝に肉の粧ひたるを知れば、色相の夢空しくさめて有限の露を拂ふべし。そも迷と云ひ悟といふ、皆汝が謎語にして、生と云ひ死と云ふ、共に汝か一呑一吐に任ず。汝ありて涙を知り、戀を知り、汝か有限の片破れに、無限を認めて人世またこんなものと曉る、汝のあらゆる人世の姿にあらずや。惡魔呼へば出でゝ舞ひ、詩神招かば又出でむ。見れば、見遣れば眞相歷々、汝か朽面の奧に籠るを見る、暫く風塵を拂ふて汝に宿らんか。

冬の韻

冬川　荒井巳名子

しげりつる草葉も霜にかれくちて水色さむし冬のさと川

玉　櫻井鐘子

人しれずみがき添えたる玉こそはつひに光も立まさるらめ

野寒草　船越艶子

うち渡す野川のながれ音たえてかれ／＼まねくしの薄かな

深夜霜　同　人

おきまさる霜かあるらしさ夜中におつる木葉の音さやぐなり

歳暮梅　同　人

心とく咲き出にけり梅のはなむかへんとしのあるじまうけに

水鳥　備後　龜山利子

さ夜ふけてなく聲さむし白鷺のこほる蘆間にふしやわぶらん

行路雪　同　人

ましばかるをのゝ細道ゆきふかく跡たえはてゝ行人もなし

案山子廼舎諸社中詠草（續）

（池袋清風大人評點）

曙　市村高彦

、、月落しあしたの山の横雲につらなる雁の聲のさむけさ

評　畫は意匠を貴ぶ。此詠若し畫ならんには、善き意匠ありとせん。歌と畫と各長短あり、畫は愚婦といへども、一目して其景物を知るの益ある代りに、過去の景、未來の情を寫すは、古來の名家も企及する所にあらず、況や聲音と思想とに於てをや。故に此詠を畫に用ゐんも、夜來月あり、今西山に沒したる事、雁の聲、及其聲の詠者の心に、寒く感ずるなどの事は、顯すべからざる也。和歌五七々々の句の續け樣能く整ひ、初より終まで、さら〳〵と水の流るゝ如く、一意貫徹して、始て感ずるもの也。初學や、下手は之に反して、句々辭々片々別々に離れて、一意貫徹せぬ三十一音を綴るもの也。今此詠を見るべし、月落しといひて、あしたとあり、月の入れば朝となれば也。山のといひて雲とあり、山には雲あるもの也。横雲は曉の山にかゝるもの也、月の入りたる後にて早朝なれば也。横雲といひてつらなるとあり、雲が横に引はへたる其端に、雁列も並ひたる景が見ゆる也。候は晩秋、時は早朝、所は山邊、皆清冷也。其雁聲の寒き勿論也。而も極寒の如く、肉躰のみ寒きにはあらず、殊に雅情の寒きなれば、中々ゆかしく感ぜられ、其點に雅味の幽妙を含む也。無風雅の人は唯肉躰にのみ寒き事と心得べし、何の味もなき事となる。此評も初學童蒙の爲に、註解的に述べたり。

故郷秋風　大阪　北里闌

、、あれしだに悲しきものを古郷の庭の粟畑あきかぜぞふく

評　躰格は古し、されど詠者は、世の歌人の如く題を得て、古歌書の類題を參考し、座上にて句を聯ねたるにはあらず、實地の景情を思の儘に述べられたる也。詠者は大阪に住めるも、生郷は肥後にて、年を經て故郷に歸りたるに、自邸及び近隣の或部分、畑地と變りたる也。九州中には米の外、粟を常食とし、畑地第一の作物は粟也。秋たけて、垂穗の頃には、過半其葉も枯れ、風及そよぐ音は、荻の葉に似たり。夕ぐれや、村雨ふる日など、寂しきもの也。幼時には宅地、若くは泉地などありし庭園、今は一變して粟畑となり、秋風にそよ〳〵音するは、今昔の感に堪へざる也。評者郷關を出てより、鹿兒島及び京阪に流浪し、二十五年星霜を經、此秋始て故郷に歸れり、されば此詠の景情は、隨所然らさるはなし、再吟三吟感何ぞ盡きん。

祖父の身まかりけるあした　同　人

、、在明の月は消にし山の端のからすの聲の身にぞしみける

評　思ふにこれも前の詠者が、同じき頃に詠みしなるべし。此詠は、唯景色の詠さしても宜しき也。尙題を見れば、在明の月は祖父に擬し、永訣の哀情曙山の鴉鳴に伴ひ、いかばかり身にしみつらん。

山家秋風　よみ人志らず

、、山里の軒端の眞葛ひるがへり秋風さむくなりにけるかな

評　別に多端の景情はあらざるも、山里の茅簷に、葛の葉のはひかゝりたるに、秋風のふくさま一興なきにあらず。葛の葉は莖長く、風ふけば飜り易し。此所のひるがへりは氣候の忽變せし事にもかゝれり、なりにけるかなは寛優に嗟嘆の辭を發し、全首をして餘韻多からしむ、亦此所ひるがへりに力あり。

時文

○方丈記評釋　中島筑山著　東京文章專修會出版

東京文章專修會主幹中島筑山氏著す處の『方丈記評釋』は、著者得意の技倆を以て、字句の解釋はもとより、修辭文躰の評釋よく、長明の文章の妙致を玩味せしむるに足る。

○大鏡讀本　花　明治書院出版

中等教育國文讀本第十二編として發行したるこの『大鏡讀本』は落合直文、小中村義象兩氏の校閲に成る。但し說には兩氏等此書の詳解書を出版したるを以て、此書には一切註釋を除きたり。而し略解位はあらま欲しく思ふなり。

○梨園の落葉　坪内逍遙著　春陽堂出版

此書は坪内氏が明治二十五年十月以降、同廿九年三月に至る間に、劇界の事に關して述作したるものにして、先の『文學その折々』の總括に洩したるものを編纂したるものにして、由來坪内氏は、日本演劇界をして、文壇に並び立たしめ、其價値を引き上げたるの功勞ある人故、其夢幻劇論、折々の演劇批評、また戲作脚本志賀松節一代記其他の雜筆、頗る多興味を以て見るべし。

○警世雜著　内村鑑三著　民友社版

内村鑑三氏が「時勢の觀察」「流竄錄」「何故に大文學は出でざる乎」「如何にして大文學を得ん乎」「日蓮上人を論ず」の五篇を輯め、『警世雜著』と題して民友社より出版す。各篇皆な當時の世評あり、今更めて言ふべきにもあられど、通讀比較するに、日蓮論を以て壓卷となす。「時勢の觀察」の如きは、多少奇警矯激の趣味なきにはあられど、筆者往々自已防衛の氣味ありて、醜陋の感を惹く。凡そ、筆者自から忘れず、其文章中に時々顏を出すは醜くきもの也。内村氏の氣の銳さ文の熱さを以て只だ此の一事を欠く、最とも憾むべしとす。近來、其名大に揚る、吾人は亦た之を追ふとを要せず、寧ろ苦言するも亦可ならずや。

○鐵道新論　片山潛著　博文館版

片山潛氏社會學を專攻して年あり、其の歐米を回覽するや別眼あり、玆に鐵道新論を博文館より出版せしめて、吾國現時の鐵道制度に戒しむる所なり。曰く、今日我國が日進月步の勢を以て百般の事業を興すに當り、西洋の經驗を利用するの迂遠なる實に驚くに堪へたる者あり。彼の瓦斯事業。水道事業、電氣事業、鐵道事業の如き、我國人は數十年前歐米諸國が旣に失敗せしとを再び繰返さんとするの傾向ありと。此の一警句、もつて全卷の大躰を推諒せしむるに足る。

○かた戀　二葉亭四迷譯　春陽堂版

『浮雲』に文名を一時に高まりし以來、鳴かず蜚ばざると爰に數年、然るに今に及んで、其『片戀』出でんとするや、讀書社會の囑望一方ならざりしに、其出でたる後、餘りに評判の高からぬは、これが露國小說の飜譯なる故か。『片戀』のヒロインは性質のヒチクレて狂氣染た露國娘、ヒーローは、敎育完成の爲めでもなし、唯何なさしに浮世の態が見たへて、旅行に出掛けた一人の靑年、此兩人獨乙で相會

し、戀情一方ならず成り立ちたれども、彼娘の性僻のイザケ狂氣染みたる處から首尾よくはかどらず。終に破れて後一生再び逢はざるの失戀談を、彼靑年、白頭の翁となりて述懷する筋なり。流石にツルゲチーフの作なれば、この靑年男女の間を描く、微を穿ち、細に入り、また譯者の苦心慘憺の筆、よく其神韻を傳へたらんが如し。然れども我等に耳遠き露國語の散見せるが爲めに、兎角興味の減ずるの憾なき能はず。

附錄『奇遇』『おびき』共にまたツルゲーフ作品の譯述にして、此等はかつて一度世に公にしたるものを訂正したるものといふ。また頗る面白く讀むべし。

◎文の庫　嵯峨の屋主人著　春陽堂版

嵯峨の屋主人が近年の述作を總合したるものにして、小說あり、韻文あり、また隨感錄あり、中小說尤も見るべく、其中にても『私の幼時』その言文一致體に、可憐の少年を描きたる頗る主人の特長を發揮せり。其韻文また見るべく、隨感錄に面白味を覺ゆ。たゞ此『文の庫』中に、『初戀』の如き、主人の傑作として見るべきもの〻漏められざるを憾む。

◎網代木　川上眉山著　春陽堂版

眉山人が前後三百回の大作を企てたる『暗潮』中の第一卷にして、此『網代木』に見えたる處にては、梅野といふ下宿屋の奧に、くすぶつて居たる、農科の學生上りの野中成一と、圖書館の學者上りの田村有造との二人、双方とも一文なしで、下宿屋のおかみさん又下婢まで又皆待されて、野中の方は、先づ夜を逃げ延びて、本所に大福餠屋を始じめ、田村も終には此宿に居かれて、かれも落のび、木賃宿に入りて、其スパラシサに魂を奪はれ、腰を据ゑ兼れて、宿を出で〻兩人餠屋で落ち合ふまでの事あり。此れらの所にては、なほ『暗潮』の如何に流れ行くやを知らず、また此處といふ質の在る處を認むる能されども、貧中の野中が餓を忍んで、人を救はんとする處、田村が野中の爲に、時計を質にはめて、金を才覺する處、質屋の無情、また木賃宿の暴狀等見るべし。眉山の『暗潮』の大主眼は、評者未だ之を知らずと雖も、察するに、彼之によりて下等社會の慘狀を緻々描出せんとするものなるが如し。なほ以下三卷の續出を俟つ。

◎新小說第七號◎ひげ男は未讀の分

女界雜俎　十二月上中期

◎女子の職業（女教師及保姆）	報知新聞	連載
◎賢妻薪を賣て夫を助く	讀賣新聞	十二月七日
◎地方の下女拂底（天涯茫々生）	每日新聞	十二月十二日
◎女傑ジョセフォン、ブッテー夫人	國民の友	第三百二十五號
◎婦女身章	救世の光	第六十九號
◎佛教夫婦論	密嚴教報	第百七十三號
◎地方の婦女子（坂本三七郎）	女鑑	第百二十二號
◎女子教育一斑	仝	

片々

◎貞婦賢女　貞婦賢女の新聞紙にありて傳へらる〻もの、此頃頓に多きを加へたるを覺ゆ。薪を賣つて夫の政治運動を助くるの賢妻なり。黑髮を斷ちて母の病を兄に報ずるの孝女あり。齡三十を過へて未だ嫁さず、父母に孝養を竭するの孝女あり。孝貞を以て官賞を受くるの女性また尠からず、一方に於ては女德の衰頽を叫ふものあるに反して、か〻る善行美事の屢、世に傳へらる〻との多き吾人甚だ之を喜ぶ。

◎婚姻の大義　のまた公正證書を以て盟約せらる〻に至る。如斯くにして後、伉儷の契、堅固なるべしと信ずるものあらば、甚だ誤まれり。伉儷の堅契、一に情の熱熾なるを要す、法律のよく如何とも志能ふ處に非ず。

◎四季花　『日本』評林の春風居士、四季花を吟す、其意の存する猶、吾人未だ之を知らず、曰く

治俗淫風戀狹斜。貴嬪學突技堪誇。尊前黃白千金戲。坐上靑紅四季花。女子風流堪大息。兒孫教育付長嗟。即今誰守婉柔德。無復一人宜室家。

◎地方の下女拂底　たゞに都合の地に於てのみならず、また地方に於けるも近年下女拂底の聲をきくこと多く、其原因は全く女工需用の增加にありといふ。

◎師範學校女教員　報知新聞の報ずる處によりて、尋常師範學校女子部の所在地及び其女教員の數をきくに、左の如く、

所在地	教諭	助教諭	所在地	教諭	助教諭	所在地	教諭	助教諭
京都	○	二	宮城	○	二	徳島	○	一
大坂	○	二	福島	○	一	香川	○	一
新潟	○	一	和歌山	○	一	高知	○	一
千葉	○	二	秋田	○	一	福岡	○	二
栃木	一	一	石川	○	二	佐賀	○	二
山梨	○	二	富山	○	一	鹿児島	○	二

また諸方師範學校にて、女教員に給する月俸額は左の如し

月俸	教諭	助教諭	月俸	教諭	助教諭	月俸	教諭	助教諭
三〇円	一	○	二〇円	○	○	一五円	○	一
二五	○	三	一八	○	一六	一三	○	二
二二	○	二	一六	○	一	一二	○	二

◎都新聞　女工の保護を論じて曰く、

今や工業の發達は多く女工を要し、現に養蠶製絲地方に在りては、女工の欠乏を感じ、多少熟練なる女工に對しては、殆んど誘拐強迫的手段を用ひて相奪ひ、甚しきは幽閉同樣の手段を以て逃逸を拒ぐものあり、而して風紀の點に於ては殆んど云ふに堪へざるものあり、其實况は蓋し我が讀者の既に知る所たり、是れ必竟勞働者保護の道なきの故なりとす、勞働問題の第一歩は實に此等憫れむべき職工の保護に在り、政府と議會は此問題に考慮する所なかるべからず。

◎歐州各國法律上の結婚年齡　歐州各國の法律上認容の結婚年齡は國によりて異同なり、之が區別すれば左の如しといふ、

國名	男子	女子	國名	男子	女子
獨逸	一八歳	一四歳	白耳義	一八歳	一五歳
佛蘭西	一八	一五	伊太利	一八	一五
露西亞	一八	一五	羅馬尼	一八	一七
澳地利	一四	一四	西班牙	一四	一二
葡萄牙	一四	一二	希臘	一四	一二

此他匃牙利に於ては、人民の奉教奈何に由り、男子は十四歳乃至十八歳、女子は十二歳乃至十五歳を以て結婚年齡と定め、又瑞西に於ては地方により男子は十四歳乃至二十歳、女子は十二歳乃至十七歳を以て結婚年齡と定めたり。(統計學雜誌第百二十七號)

◎男女高齡者、人類六十歳に至れば、平均女子の數、男子に超過するは統計上の事實にして、我邦にて最近の統計によれば、六十一歳より六十五歳に至る年齡のものにては、女子百人に對する男子九五にして、以上女子の數漸々に增加し、百六歳より、百十歳に至るまでの年齡のものにては、女子百に對する男子六六、七なりといふ。然るに六十歳以下の年齡にては、女子百に對する男子の數、常に百以上に在り。

◎小學女教員の十弊　教育報知の寄書家小學女教員の十弊を擧げて曰く、(一)助力多きに過ぐ、(二)一時に多量を教授す、(三)讀書教授の何たるを知らず、(四)教育學を講究せず、(五)姑息の教授を事とす、(六)生徒の性質を識別せず、(七)書取りに注意せず、(八)修身教授の材料を撰擇せず、(九)練習を怠る、(十)作文は和辭に流る。

時報

◎女流畫家名譽戰死者の肖像を描く

市幗洋畫家中の女俠と兼て聞及びたる日高文子女史は、其姉君と同もに、過に左の献納願を其筋に差出されたり、

油繪肖像献納願

先般征淸の師起り候以來忠良なる我外征陸海軍の御方には炎熱如燬の候に際して勞苦を犯し酷寒如剪の時に當りて艱辛に耐へ陸に海に勇戰奮鬪大いに國威を海外に燿かし名譽ある戰死を遂けられ其國に盡されたるの至誠實に萬世の龜鑑にして私共敬愛感激の至りに堪へず候仍て右戰死の將校及び下士卒の內陸軍海軍共各將校下士方凡そ十名兵卒方凡そ三名程大約一尺八寸竪二尺五寸の油繪竪額凡貳拾六面之に相當の額緣を附し描寫し（下名の文は描畵に從事しりきは資料を辨し）光輝ある肖像を靖國神社構內遊就館に納め忠貞勇武なる美名と共に其風采をも千載の下に傳へ人をして永く瞻仰追懷せしむるの一助とも仕度仕願に御坐候何卒特別の御詮議を以て私共の衷情御採納被成下右献納の儀御聞屆被下候はゞ難有仕合に奉存候此段奉懇願候也

明治二十八年三月二十二日

東京市麴町區一番町四十七番地
平民日高秩父妻
呉　りき
右秩父妹
日高文子

陸軍大臣伯爵山縣有朋殿
海軍大臣伯爵西鄕從道殿

追て本文御聞屆之上は各描寫可仕人名取調可申上は勿論各描畵着手之前其名前御屆可仕候也

追記現品は描成次第順次に靖國神社々務所に納付可仕候此段申添候也

然るに海陸軍兩大臣は去年四月十日を以て、願之通許可の件指令ありしかば、同

六月より揮毫に着手し、爾來一日も措かず、本年秋季の靖國神社大祭迄には陸海軍將校各四名宛の肖像を了て献納し、現に遊就館裡に展覽せらる。殘り十八迄を悉皆卒業せらるゝは何時なるやを知られど、經營慘憺の尋常ならざるが故に、恐らへは尚一二年を要すべきか。巾幗の身を以て此の美なる大事業に熱せらる、殊勝の御心掛には有がたけれ。

◎フレーベル會

幼稚園の改良發達か企圖するを目的として、本年四月二十一日を以て創設せられたるフレーベル會は、現今の會員百名あり、會長は女子高等師範學校々長秋月新太郎氏にして、なほ同會の規則は左の如し。

第一條　本會は我國幼稚園の改良發達を圖るを以て目的とす

第二條　本會はフレーベル會と稱し東京に置く

第三條　本會員は左の一項若くは數項に該當し且會員の紹介ある者に限る

一　嘗て保姆の職に在り若くは現に保姆の職に在るもの

二　直接に幼稚園に關係あるもの

三　其他幼兒の保育に篤志なるもの

第四條　令聞名望ある人にして本會の事業に稗益ありと認むるものは特に請ひて客員となすことあるべし

第五條　本會の目的を達せんか爲に總會及ひ常會を開く

但會長の意見により臨時會を開くことあるへし

第六條　總會は四月二十一日之を開き左の事を行ふ

一　保育に關し大家の演說　　二　保育方法の實驗談

三　幼稚園成績物展覽　　四　會務報告

第七條　常會は二四六月十月十二月の第一土曜日午後一時より開き左の事を行ふ

一　保育に關し大家の講話　　二　保育方法の實驗談

三　保育方法に關する協議

第八條　本會は毎年一回報告書を印刷して之を會員に配布するものとす

第九條　本會に左の役員を置く

會　長　一人　　會務を總理す

幹　事　十人　　會長を補佐し會務を分掌す

評議員　若干人　會長の諮詢に應して重要なる會務を議定す

第十條　會長は客員中より推薦するものとす

第十一條　幹事は會員の互撰とし其任期を二ヶ年とす

第十二條　評議員は會長の特撰とす

第十三條　會費は一ヶ年三十五錢とし總會の節之を納むものとす

第十四條　保育に關し特に成事項を研究せんとするものは組合を設くることを得此場合に於ては規約を定めて會長の許可を經へし

第十五條　此規則は會員三分二以上の同意を得るに非れは變更することを得す

◎獨立女學校に於ける慈善會

本月五日午前十時より午後五時迄、府下北多摩郡角筈村獨立女學校に於て慈善會を催せり。右は同校にて製造の品物を陳列參觀せしめ、且つ販賣して、所得を同校の維持費に向くる筈にて、午後には余興として、青年音樂隊薩摩琵琶などの催あり。同日參觀者百餘名にして、內には樺山內相令夫人などと見受たりといふ。

◎安井てつ子の英國留學

女子高等師範學校訓導安井てつ子には、今回文部省より、教育學及家政學研究の爲め三年間英國留學を命ぜられたり。

◎臺灣の女子敎育

臺灣總督府は、嚮に國語傳習所を全島の要所に開設して邦語を傳習せしめ、明年度より更らに師範學校を設立し、小學教育の基礎を建設せんとする計畫なれば、男子の教育は他年中外の耳目を一新するに足るものあるべしとするも、之と同時に女子教育も亦決して忽諸に附すべからざる事情あり。殊に臺灣女子の教育は、最も至難なる事業にして、現に廿三年間の久しき同島に居留せる、英國宣教師マツケー氏の如きすら、幾度か之を企てゝ遂に成効を見る能はず、僅に宜蘭地方のペポパン（熟番）の女子教育を試みつゝあるに過ぎずと云ふ、然れども伊澤學務部長は、熱心に女子教育の研究をなし、或は華族女學校高等女子師範學校共立女子職業學校等に就き、生徒の手藝品を始め習字其他各種の成蹟を蒐集し、歸臺の上教育博物館に陳列し、親しく之を土人に示して女子教育を奬勵し、先づ試に八芝蘭に女學校を開校し、土人の嗜好する造花裁縫の如き工藝を學ばしめ、傍ら、讀書算術を教授し、不知不識の間に日本なる觀念を養成し、漸次全島に及ぼさん

ものとて、昨今之が調査中なりと云ふ。（東京日々新聞）

また讀賣新聞の報ずる處によれば、臺灣同地水邊脚に一婦ありて、能く古書に通じ、筆談亦よく、我と辨するよしなるが、かゝる婦人は他に殆ど無之有樣なるに、此程兼松某氏の設立にかゝれる大龍洞なる日臺語學校に、七名の同地女童就學の申込をなしたりとぞ。是ぞ臺灣新領以來女子教育の濫觴といふべき。因にいふ同地淡水には宣教師マッケー氏設立の英語女學校ありとぞ。

◎孝養者賞與

廣嶋縣安藝國賀茂郡西條町
松浦亦之助妻　セ　キ

資性溫和幼より孝悌の道を竭す其家夫に入るや家素より饒ならず克く難苦に耐へ拮据黽勉日夜非常の勞働に服し倦怠なく殊に別居の舅姑に事へ孝養最も厚く其赤貧自活する能はざるを以て自家の貧窶を顧みず時に自己の衣服を典賣して嗜好を薦め衣服を給し一意承歡懇篤到らざるなし舅歿し姑老衰起臥の自由を失ふや之を自家に入れ常に左右を離れず凡飲食藥餌の供給より汚穢の滌濯に至るまで一身に負荷し毫も不自由を感ぜしめず又夫に對し貞節を守る等其志操を變ぜざる事十三年一日の如く洵に奇特とす仍て其賞として金一圓五十錢下賜候事

明治廿九年十二月四日

廣島縣知事從四位勳三等折田平内

◎熊本尙絅女學校の補助費削らる　熊本の私立尙絅女學校が曩に運動會を催ほして女子にあるまじき擧動を演じたりとの大評判となりしが爲め、兼て、明治三十年度より縣費を以て同校を補助せんとして、其箇條議事案中にありて、此程縣會に掲出せられしや、質問續發し議論三時間餘に亘り、遂に該補助費は全く削除することに決せしといふ。

◎女子高等師範學校入學試驗　同校入學志願者廿四名は、十二月二日東京府學務課に於て試驗執行したり。

◎長崎婦人會總集會　長崎婦人會は十一月廿一日午後七時より、商人集會所に於て、第五總集會を開きたり。出席者は六十名内外にして、來賓大森知事の醜業婦德化談などなりし由。

◎婦人教育會　十二月九日午前十時より越後國刈羽郡石地町極樂寺に於て、第二回婦人教育會を開きたるが、出席會員九十二名、傍聽者約五百名にて當日長岡より招聘したる草間慧淨氏は、有益なる演說を爲し、次に風俗改良及び殖產上の談話等ありたりと。

◎遊廓增設と廢娼の爭論　愛媛縣會は去る廿三年縣知事に向け、向後五箇年を期し、縣下の遊廓を全廢すべしと建議したるに、本年の縣會にては、右の建議を取消し、更に遊廓の增設を建議し、宇和島、今治の兩町及び、風早郡北條村等に之を設けしめんと運動するものあり。之に反對するものは、既に廢娼を建議したるものが、今更ら遊廓增設を建議せんとは、議會の體面に係ることにて、縣知事も斯る前後矛盾の建議を受けては、其處置に當惑することならんと主張し、此程より双方頻りに運動し居れるが、此建議議場に上らば通過すべき形勢なるより、其場合には反對者即ち廢娼說の議員は、議會の面目を失ふものとし、一同辭職の決心なりと云ふ。

◎婦人傳道會社　東京北部の聖公會婦人の發企にて婦人傳道會社を發起し、來る一月廿日頃其第一回を催すよし。

◎關水機關車の特効

前號紙上に泡鳴子の記述したる關水春吉氏の彈力機關事の効用を、なほ委細に聞くに、現在氏の同車雛形として創製されたる機關の臺車、即ち前號記したる處の、機關の重量二貫目、水銀の量一貫目なるものにては、之に依て米二俵を引くとを得べしとぞ。若し水銀四万斤を用ふるものならば、其水銀の價を四万圓と見積り、之を以て永久に通常滊車の馬力を有し得べしとぞ。この機關をばまた明年廻航せんとする所の新造軍艦富士等に通用すれば、第一に二晝夜もかゝりて積込むべき石炭を要せず、二十個の釜を要せず、從つて機關部員の殆ど百名あるを半減し得べし。而て其進行するに、速力を減せず、烟を吐かず、音を出さず戰鬪上大に好都合なり。若この機關の恩澤龍動市中に普及せば、かの林立せる烟突を突て倒して、不健康なる黑霧を挑き、蒼生の健康以前に百倍し、また數万の製造所は却ていよ〳〵繁榮なるを致さん。果して然らば國家經濟上、社會衛生上、その利益幾何なるかを知らずといふ。

女學雜誌 自四百十八號至四百卅二號 總目錄

◎社說

宣教師派女學校將來の大事業 一
亞細亞の開導に於ける吾國婦人の責任 四
內助論 六七
高等女子教育 一〇九
我國風血統を重んずるは言ひ難し 一四九
天災の解 一九一
東北維新の機 一九二
災禍の救濟 一九二
女學の勃興 一九三
時弊を言ふの空論 二三三
家庭亂 二七三
文界の閨秀 三一五
女子高等教育の器關 三一七
實地の家政學 三五五
舊家の改革容易にすべからず 三五七
基督教界時勢論 三九七
家庭團欒を見ざる盲人 四三九
家外の風雨 四八一
瀧の川孤女學院 五二一
一歲の所得何ものぞ 五六一
內地雜居の後の女學、英學 五六二

◎女學

女學を顯現するの躰 一九
勤儉と貯蓄(一)(藤井淡海) 二〇
懷故のなつかしさ 二八
下女の賃金の騰貴 二九
勤儉と貯蓄(二)(藤井淡海) 三〇
繼母の地位(山下石翁) 六九
女性と朗讀(赤石賴一) 七二
女子教育今日の趨勢(鷗村子) 七三
結婚の眞意義(杜鵑子) 七七
勤儉と貯蓄(三)(藤井淡海) 七九
現今の婦人問題 一一二
(文相が女子教育論 ○教育時論が戰後の女子教育○萬朝報の『新選女大學』○女子と傳道○迷執と女性教育○女子の職業)
科學としての家政學 一二二
久米邦武翁の女權論 一二六
卒業の女學生 一二七
貞潔の姿の變遷を論じて女禮科の教授法に及ぶ 一五二
女學界の風潮 一五四
「(一)女子のデリケシー(二)意育情育(三)鑄型的女子教育(四)女子の血液と高等教育(五)大隈伯の女子教育談(六)女子の職業」
勤儉と貯蓄(四)(藤井淡海) 一六二
女教師論(渡邊敏) 一九七
時事翁近時の女學論 二〇二
女子の職業 二〇六
婦人雜誌流行の時代將に來たらんとする歟 二〇九
松方伯の女子教育談 二〇九
松本君子氏の日本婦人說 二〇九
詩的手藝 二三六
聰翁の婚姻論 二三九
女子の職業 二三九
女學教師清俗の感 二七五
ストウ夫人が半面の歷史 二八〇
家庭の氣品 二八四
歐洲諸國皇室の姻戚 二八七
女權伸張の方面 三一八
女德の美觀(鷗村生) 三二〇
女子の職業 三二四
日本女學の大勢 四〇三
女學校の美育 四〇五
小兒の天才(曲浦生) 四〇七
產婆 四一〇
男子女學を知るの用 四八三
宣教師女學校の一長所と現今我邦教育界の一
缺點(增野悅興) 四八九
女子と文學の主義(三輪田眞佐子) 四九二
東京乞食の總頭領は多情多恨の一婦人 四九四
蓄妾聘妓の害 四九五
女學卑近の研究 五六五
毒婦を論ず(櫻井鷗村) 五六六
男子、女德の衰頹をいふべき乎 五七〇
離婚の人 五七一
明治二十九年の女學界 五七二

◎家庭

家庭を幸福にする要件(星野光多) 三六〇
山遊び(淡海子) 三六三
下女の拂底 三六五
東京と西京との染物 三六六
帶の話 三六七
養蠶の經驗より得たる育兒法(相馬愛造) 四四二
栗に毬あり柿の實は赤し 四四四
燒薯屋の變遷(さる男) 四四四
經驗悉く信ず可からず(もみぢ) 四四五
鏡にむかって已惚の人(すれ男) 四四六
化粧の今昔(いぢわる) 四四七
牧師の妻(如雲) 五二六
名士の子に愚物多し 五二九
改革せざる改革 五三一
室家の音樂(鷗村) 五三二
子供の言葉 五三六
桂を燒き玉を炊ぐ 五三六

◎評論

芭蕉が遁世(上)(知十坊) 七
閨秀小說を讀む(小此木秀野) 一〇
波狀曲線論(有樂堂主人) 四〇
春夜漫錄 小此木秀野 四三
芭蕉が遁世(下)(知十坊) 八七
福澤先生の大悟徹底(井上次郎) 一二九

薄情の辨(なにがし)　一三三
德義的問題に就て世間大方の解釋を求む(文學博士加藤弘之)　一六五
小公子の譯者若松賤子君(森田文藏)　一六九
宇宙實躰私慾論(齊柳猛)　一七二
加藤博士の實淫論(久津見蕨村)　二五三
我國同胞の弱點(如雲散士)　二九九
兩極の想念(靜淵)　三二五
熱誠と偏執とは同じからず　四一一
墓地(靈性的公園としての觀察)　四一三
當今の學風(如雲散士)　五〇三
宗教家の改革談(如雲散士)　五七五

◎觀潮 (觀勢)

監獄の教誨　一五
乞兒と盜賊との關係　一六
貧民に就て　一六
娼婦出稼奬勵論　一六
社會問題と基督教　一七
社會問題講究の必要　一八
世界全躰に安心を與ふる策　一八
晩婚　三二
犯罪及囚人　三四
所謂流行　三四
婚姻及葬儀費用　三五
早稻田文學の雜界　三六
婦人問題　三七
歐洲諸國の人口減少　三八
支那の乞丐兒　三八
厚葬排斥と墳墓廢止　三九
蠻俗の一二　八二
淨瑠璃樂に就て　八四
神佛の祭礼と風俗壞亂　一六三
四國地方の社會狀態　一六四
明治維新後の國民の思潮　一六四
大異變と國民の道德　二〇九
都會問題　二四一
家庭教育上の一問題　二四二
關西の民家と關東の民家　二四五
京都人士と東京人士　二四五
偏狹國家主義の反動　三四一

◎教育

戰後の教育界　八九
體育問題　一三四
西園寺文相の教育意見　一三七
教育と犯罪との關係　一三七
久保田讓氏の將來學事意見　一三八
教育議案　一三八
小學教員待遇　一三八
基督教學校の變象　一三八
國學院保護　一三九
教育費　一三九
豫算成立教育案　一三九
戰後教育の弊處(一)(鷗村)　一八一
小學先生衣食足る乎　一八四
教育社會の不振　一八五
三名士の教育說　一八五
戰後教育の弊處(二)(鷗村)　二一二
敵愾心の挑撥　二一六
渡航後の大須賀亮一君　二一七
學校衞生の取調　二一八
日本學生の不健康　二一八
美術學校と音樂學校　二一八
夏天の教育　二一八
音樂趣味の教育を論じて音樂學校に及ぶ(鷗村)　二四五
各種教育會　雜纂　二五〇
小學教員俸給問題　二五一
海嘯地の教育　二五一
海嘯と教育　二五一
忠義論の爭ひ　二五一
教育界の缺乏　二五二
國語、漢文、英語、　二五二
夏期講習會　二五二
教育悟の徹底　二九一
天才と學校教育　二九三
學校教育は智育に偏するものなり　二九四
學校教育は普通教育なり　二九五
大教育家を求むるの聲　二九五
ヘルバルト學說　二九七
華族教育の方針　二九七
蠻民教育の方針　二九八
今日の學風　二九八
大隈伯國民の教育を談ず　二九八
外國人設立の學校　三三三
教育家の熱誠(一、二)　三三五
村學先生　三三八
村學の官臭　三三八
金儲と教育　三三九
教育會の合同運動　三三九
教育界の富む所　三三九
雜種兒問題　三三九
米國通信(大須賀亮一氏)　三四〇
官學及私學(鷗村)　四一六
寄宿舍教育　四一九
教育家の勢力　四二一
國師てふ文字　四二一
小學教員の俸給平均額　四二一
教育界の內幕　四二三
小兒の玩具　四二三
學校生涯の快樂(鷗村)　四九六
學生風儀の衰頹乎、教師風儀の衰頹乎　四九九
下宿屋　五〇〇
ベースボール　五〇〇
教育論者の筆鋒謹嚴ならず　五〇一
宗教と教育　五〇一
教育會の現狀　五〇一

米國白痴教育通信（大須賀亮一氏）　五〇一
獨逸教育界　五八一
（開發的◎人才登用◎文部大臣◎官吏養成◎一校の長◎教育を輕ずべし◎氣節慷慨の教育）
福澤翁の教育論　五八四
府下の二大教育會　五八四
學生の罪惡　五八五
學生の風儀　五八五
學校の價値　五八五
英國教育の現情　五八五

◎隨感

記臆を歷したる蓋　二一五
未だ文あらざる時　二一五
衆と同に誤論せん　二一五
何ぞ奪はれたりといふや　二一五
火の熱轍と焔の舌　二一六
嗚呼瓦よ石よ　二一六
之を失ひしには非らざる也　二一六
斯る不肖の子　二一七
幽明の界、去現の間　二一七
以て起つことを得べし　二一七
古習舊慣の神聖　一九四
火葬の情義　一九四
馬車のよしあし　一九五
西幸吉氏の薩摩琵琶　一九五
文難　一九七
鑑識の道高潔にあり　二五六
評論は信仰にあらず　二五六
釋尊を評する基督教徒　二五七
消極、積極　二五七
亡夫の遺業に仕ふ　二五七
米國民の精髓　二五八
ミッション、スクールの將來　二五八
情慾の調べ如何に響く　二八八
蓮岱稲房の隱士　二八九
花散りゆけば花を忘る　二八九
寡婦未だ嘗て多く訴へず　二八九
女性の嫉妬　三三〇
名士の子　三三〇
離めろ尼よ　三三一
先づ之を愛せよ　三三一
法士の合同　三三二
彌勒の下生　三三二
夢に道士に逢ふ　三三二
落ちて驢前馬後に在り　四三二
中夜孤影を見て寂しからず　四三三
吾心中の花　四三三
惡覺嘲つて曰く　四三三
處女　四三四
言行不一致なるべし　四三四
『何ごと子』の歌　四三四
水車、秋聲に嘆ず　五一三
人が見ること薤の如し　五一四
鬱憂に二途あり　五一四
女性を知らざる原由　五一五
遊子其内助あれ　五一五
理勢由とからず　五一五
死と眠、差別如何　五一六
虛靈自照不勞心　五八六
未だ嘗て名士を見ず　五八六
非情の情　五八七
死別生別の恩　五八七
根本的改革　五八八
歸夫齋正一　五八八
忝けなさの至情　五八八

◎文藝

作文第一の緊要事　三六八
花園の歌袋　三六九
作歌の要義　四五三
花園の千草　四五六
歌のいろ〳〵（花園撰）　四五六
書の道（石翁）　五四五
案山子廼舍諸社中詠草（池袋清風大人評點）　五四六
花園の下草　五四七

◎史傳

懐舊御殿奉公（かもめ筆記）　三七六
樂聖セシリヤ　五四八

◎講義

近頃の大水　三七〇
米の話（若年寄）　四五九
彈力機關草の發明家、關水春吉氏（岩野泡鳴）　五三七

◎隨筆

信望、愛三個人の圖に題す　三七三
秋の夜のともしび　三七四
老人逸話（北風大火事あらん）　三七四
女ごゝろ「（一）女はれつきもの〇（二）愛情の借錢とり〇（三）男女誘惑の相違」（山下石翁）　三七五

◎大和心

『大倭心』を『女學雜誌』に併すことにつきて（長井行）　四四八
往時夢の如し（上）（三輪田眞佐子）　四五〇
女性の脩養（曉霧）　五七八
一葉女史を傷む（波濤）　五八〇

◎兒鑑

幼年文學と漣山人（鷗村子）　三七九
ばけ井（さち子）　四六四

◎問答

男女相擇ぶの可否　三八四
夫婦信用今昔の變　三八五
人情を知る方法に就て問答　四五七

氣むつかしき男子の慰め方 五五〇

◎雜錄

我心懷(杜鵑子) 四八
斷腸の記(流水庵) 四九
寄野中平氏夫妻祝新婚(青柳猛) 五五
寄婚祝歌三韻(湯谷紫苑○島崎藤村○櫻井鷗村) 五六
墓所のまぼろし(青柳有美) 九二
割戀の愛(蕉雨) 九五
靈何を以て美乎(かもめ) 九六
若松の落葉(若松しづ子哀悼の悲韻) 九七
(追悼の歌(花圃)寄松懷舊(紫苑)。挽若松賤子歌(殘花)。悼嚴本夫人(花影)。君やなし(杜鵑)。若松賤子の君の追悼會に(家永えい子)。おなじく(船越艷子)○俳句(知十)○詩二首(宇山香陽、木村芥舟)○和歌十五首○弔詞二文(田口卯吉、島田三郎))
我國の女消息文 一〇三
女子教育偶感 一〇五
女子就學の僅少なる理由 一〇五
音樂と指環 一〇五
基督教徒大親睦會 一三九
音樂演奏會盤評 青柳有美) 一四一
歌、(下田歌子)○詩(中島俊子) 一四二
愛、撰び及婚義 一四二
愛と智慧、(つなぎ) 一四四
春の蝶(三輪田眞佐子) 一四五
案山子廼舍諸社中詠草批評(其一) 一四六
落穗(新作謠曲)(明石居士) 一七四
卒業の女學生に別れを惜みて妻を失へる人を想ふ(有美) 一七八
挽若松賤子歌(佐々木信綱) 一七九
案山子廼舍諸社中詠草批評(其二) 一八〇
杜鵑錄(秀野竹文) 二一九
病後小吟 スフィンクスの謎語○事業○生死
人生に奉ずるの樂)(鷗村) 二二四
貧民學校女教師の述懷(川井小雪) 二五九
情念(長汀生) 二六一
人?惡魔?(其一)(劍婦を罵る人◎告某子書◎忍か開演發會◎婚姻前後の奇象◎釋尊と父帝◎エドウヰン、アーノルド◎戀を汚すもの)(青柳有美) 二六二
案山子廼舍諸社中詠草批評(其三) 二六七
情なき世と花影子 三〇三
波上の明月に南州を憶ふ)曲浦生) 三〇五
人?惡魔?(其二)至小なるベツレヘム。ユートピア
(二つ三つと青柳有美) 三〇七
案山子廼舍諸社中詠草批評(其四) 三〇八

嵩仙草雲子(如雲生) 三四三
詩仙の天眞 三四五
雨窓漫唫(曲浦生) 三四五
(嵐のなごり○浦わの朝霧(今樣)○天災頻に到る○心こそ神聖なれ○やさしさ)
月影深水中に沈んで相抱く(伊藤保吉) 三四八
戰時看護婦たりし我經驗(なにがし) 三八六
如何か是れ美人(すれ男) 三九〇
髪の毛一すぢ(いちわろ男) 三九一
洪水の記(佐藤初子) 三九二
小說野路の菊(其一)(紫琴女) 四二三
月下聽蟲(紫苑の山人) 四二六
人が崇拜する時の心得(青柳有美) 四二七
破窓偶語(人○魏而已むべけんや)(長汀生) 四三〇
若松しづ子の君を思ひ出で丶(鹽見愛郎) 四三二
洪水(猛迂生) 四三二
女禮談 四六七
小說野路の菊(其二)(紫琴女) 四七二
歌(富山鐵之助○稅所篤子) 四七四
理想の顏と自然の顏と(雨夜亭) 四七四
西京だより 四七五
さる老人曰く(かへで) 四七五
小說野路の菊(其三)(紫琴女史) 五〇五
作り露(棚橋絢子) 五〇八
森の小萩(白衣) 五〇九
夏野にて(泡鳴子) 五一一
染井の岡(曲浦) 五一一
ひとつ心(高瀨花陵) 五一三
小說野路の菊(其四)(紫琴女史) 五五一
樋口なつ子ぬしをいたむ(殘花) 五五四
四季の歌(紫苑) 五五六
歌のかず〱(花圃女史撰) 五五六
秋風辭(隱花生) 五八九
貞操觀(青柳有美) 五八九
髑髏(井口子) 五九二
冬の韻 五九二
案山子廼舍諸社中詠草批評續 五九三

◎時文

女子處世論◎桐一葉◎青年小說◎鳰の浮巢◎大和武士◎女子教育◎岡山孤兒院年報◎戀愛の福音◎博物示教◎血の淚◎再婚と貞節との關係◎「日本」週報の和文◎近時の文學論◎男女の關係と教育◎國家論◎教育時論◎福翁百話◎勞働會雜誌◎實用養鷄全書◎西洋立志編◎犯罪救治論◎成業立身錄◎親鸞眞傳◎シルレル◎冷熱◎水の聲◎ひとり娘◎異鄉の友垣◎逢合傘◎白百合◎國運の進歩と基督教◎講壇の英傑◎流水庵のシルレルを讀む(曲浦生)◎食事時◎看病の心得◎小說家◎大村少尉◎うらわか草◎斷蜑流水◎樓主の懺悔物語一節◎女學論壇雖狙◎發明家◎世界將來の海王◎日淸陸戰史◎日淸戰爭繪卷第九◎七月中女學論題一斑◎新小說第一號◎小号御所◎世界の日本出づ◎史海の廢刊◎岡山孤兒院新報◎鍛鍊せる人の語◎婚姻進化論◎今日の文章◎女學論題一斑◎開國先登提督波理◎日本美術全書沿革門◎小學遊戲教授書◎普通裁縫書◎海戰畫帖◎さんさ時雨◎かるかや物語◎秋の夕ぐれ◎大倭心◎女學論壇◎文界片々◎東西南北◎心の緒琴◎河內屋◎壽王冠者◎名人逸話◎女學論壇一斑◎日本大辭典◎はいかい名家選◎實用看護法◎たかれの雪◎文學そのをり〱◎太陽小說第二篇◎籠まくら◎浮木丸◎世話女房◎女學論一斑◎闇のうつゝ◎青葡萄◎聲曲自在◎大日本第一號◎八咫烏◎女學文壇一斑◎海戰畫帖第二集◎小絃集◎鈴舟◎露の蝶◎かまはぬ坊◎女學文壇一斑◎支那文明史論◎カルバート◎田村將軍◎江湖文學◎阿蘇のけぶり◎照日姫◎小說六佳選◎初陣揃◎鷲の羽風◎女學文壇一斑◎方丈記評釋◎大鏡讀本◎梨園の落葉◎警世雜著◎鐵道新論◎かた戀◎文の庫◎網代木

◎片々◎時報

附錄

粧飾の妙理(青柳有美) 新年附錄
日本の衣服(小論)附說 木版、銅版、及石版(末松謙澄) 同
新日本女學論史(櫻井彥一郎) 同

挿畫

信、望、愛三佳人 第四百二十八號
聖母聖子影像 第四百二十九號
光(マックス氏畫) 第四百三十一號



明治女學校義捐金廣告

第八回

金四十圓也	上州佐野町	小島清子殿
金二十圓也	東京	郷純造殿
金十圓也	神戸	神戸女學院殿
金十八圓也	東京	松尾とら子殿
金同	東京	渡邊まう子殿
金同	東京	湯谷くら子殿
金十四圓八十錢也	同	辰野たつ子殿
同		上田たけ子殿
同		大須賀きよ子殿
同		小野澤操子殿
金二圓也	佐渡大里郡深谷	高橋たか子殿
金五圓也	甲斐南都留郡桂村	川合立玄殿
金一圓也	日高國沙流郡門別村	岩野みゑ殿
金一圓也	同	飯田榮二郎殿
金一圓也	同	片倉かほる殿
金二圓也	千駄ヶ谷原宿	伊知地雪子殿
金一圓也	甲府	土屋七右衛門殿
金一圓也	同	土屋常世子殿
金三圓也	甲州西山梨甲運村	鶴田久作殿
金五圓也	但馬出石郡資母村	今井甚兵衛殿
金二圓也	神戸女學院	大島花子殿
金二圓也	同	エス、エー、ソール殿
金一圓也	埼玉縣比企郡小川町	關根都子殿
金二圓也	大坂東區今橋	岸本この子殿

社會學會會員募集

一本會は社會學の原理、社會主義、社會問題等を攻究するを以て目的とす。

一本會の趣旨を貫徹するの方法は講演及雜誌發刊の二とす。講演は春秋二回開會す、臨時茶話會を催す。雜誌は毎年四回、三月六月九月十二月發行す、「社會學雜誌」と名く。

一本會の目的に同意の者は何人と雖も入會することを得入會せんと欲する者は住所姓名を詳記し之を事務所に通知すべし。

一本會々員は會費半ヶ年分金五十錢一ヶ年分金一圓を本會事務所に宛て一月七月の兩度に收むべし三ヶ月分二十五錢宛收むるも妨けなし

　但在地方會員は入會申込と同時に半ヶ年分若くは一ヶ年分を收むべし

一雜誌は當分四季一回發行して會員に頒布す會員外の有志者は一冊に付三十錢送付すれば呈すべし。

一本會の趣旨を賛成し半ヶ年金一圓五十錢、一ヶ年金三圓を收むるを維持員とす

一會員は本會の講演に出席し寄書、質問等を爲すことを得。

一事務所は東京市下六番町六番地に置く。

附、雜誌發行に至るまでの記事報告は「日本宗教」に掲載す、第一會、及雜誌初號發刊は來春とす、會費は來る一月よりの計算とす

東京市麹町區下六番町六番地　**社會學會事務所**

右主幹　靜淵　布川孫一

特別賛助員

（いろは順）

巖本善治君　本多庸一君　横井時雄君
横山雅男君　田口卯吉君　津田仙君
大西祝君　加藤弘之君　片山潛君
吳文聰君　三宅雄次郎君　島田三郎君
元田作之進君　元良勇次郎君

日本宗教界評論の評論

日本宗教

十二月廿日刊行
第二卷六號要目

口繪　聖母と聖子

◉法主改革の聲……社説
◉北海道の墓地……社説
◉社會學會設立の趣旨を讀んで……横井時雄
◉社會學的宗教觀の傾向……山形東根
◉我邦將來の宗教……片山潛
◉社會の罪とは何ぞや……久津見息忠
◉我が宗教の經驗(四十餘年來の回顧)
◉禪宗及禪學の誤謬……海老澤四郎
◉ロイド氏の彌勒論……革堂
◉人生目的論爭を觀る(完)……觀潮花
◉托鉢修行……得一子
◉明治二十九年日本宗教界一覽表(前半期)
◉宗教と社會主義
◉大谷派本願寺改革運動
◉田口卯吉氏の宗教意見○宗教結合の進化○文學者と宗教的信熱○其他數十の思潮○新刊雜誌細目錄○宗教界時事

◎歌詠募集

◉季、雜、戀、其題は何にてもよろし。短歌今樣ともに、有志の投詠を待つ。
◉投詠ありたるものは、三宅花圃女史の撰を乞ひ、其秀逸なるものを掲ぐ。
◉所々の歌會の兼題、即題の撰も入りしものは、其儘撰者の名を附して掲ぐ、たゞし天地人の點あひたるものに限る。
◉寄詠は凡て本誌每月十日發行に載す。

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年十二月廿四日印刷
明治廿九年十二月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)



